
僕は友達が少ないEX

ミルクルミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は友達が少ないEX

【Nコード】

N2156P

【作者名】

ミルクルミ

【あらすじ】

『僕は友達が少ない』の二次創作です。オリ主視点で進んでいきます。

ブローグ

友達ってどんな感じだろう……。

……語っておいて何だが『自分で言って悲しくねえの?』的なツッコミはなしの方向で頼むわ。正直悲しいし。

聖クロニカ学園——今現在は昼休み。本来の学生なら、仲の良い友達と駄弁りながら食事を楽しむ、学園生活の中でも一番と言える時間。しかし、俺こと柊冬馬はこの時間が最も苦痛だった。

だって回りから笑い声が聴こえてくるのに俺自身はパンのビン—ルの音しか立ててないんだぜ? なんかすんげえ気まずくね?

え? 友達と食べば無問題だつて? ……友達って……いないと一緒に食えないだろ? ソレのいない俺にその答えは口にできねえんだよ……。

「はあ……」

溜め息を一つ吐き、視線を外へ向ける。教室の中をぼんやりと眺めるのもかまわねえんだけど、友達のいない身としては心がチクチクと痛いワケよ。

空を眺めながら少し思案する。

……別にクラスの連中と仲が悪いってわけじゃない。単に俺が一步離れた位置にいるだけだ。

……矛盾してるのはわかってる。自分から話しかけないと、友達なんてのはできやしない。だったら何で自分から向かっていかないのか。

「……はあ……」

再び溜め息。考えるのも億劫おっくうになってきたし、いつも通り男子ト

イレの中で音楽聞いて昼休みを潰そうかと実に寂しいことを考えながら立ち上がると――

「星奈さまぁ！　どうか俺を踏んでください！」

二次元に引つ越せよ teme と言いたくなるような言葉が聞こえた。ぶっちゃけドン引きだ。

声のした方を見ると――

「仕方ないわねえ……。ほら、俯せになりなさい踏んであげるから」

金髪碧眼、弱冠つり目で、遠目でもわかる程に良いスタイルをした綺麗な女子がいた。

一柏崎《かしわざき》^{せな}星奈。この聖クロニカ学園の理事長の一人娘らしい。

そしてクラス中の女子から柏崎の方へと視線が向く。柏崎は気付く様子もなく、

「ほら、これで満足？　それとももっと強く踏みたいの変態」

「ぐふう星奈さまぁ！　もっと強く踏みたいですう！」

……そう言えば柏崎って男子からはよく話は聞くけど、女子からはあんまり名前聞いたことねえな。もしかして嫌われてんだろっか。

「って……勝手に俺のお仲間を作るワケにゃいかねえよな」

自分の中で勝手に同性の友達がいらないことを決めるのは失礼だな。

……ここにいるても耳障りな声しか聴こえて来ねえし、いつも通りトイレで時間潰すか。

入り口の所で見たくもないプレイをしている柏崎＋その他大勢に近づく。……近づきたくねえけど、教室からでは仕方ねえからな。

「悪いんだけど、どいてくれるか？」

「え？」

男を踏むのにそれ程夢中になっていたのか、それとも意見されるとは思っていなかったのか、柏崎が驚いたような表情で俺を見上げてきた。……近くで見れば見るほど可愛い顔してんな。まあ、それで同性に好かれれば完璧なんだろうけどさ。

柏崎は驚いた表情のまま、

「アンタもこいつ踏みたいの？」

「何ふざけたこと言ってくれちゃってんのお前！？」

心底驚いた。そして声をかけたことに後悔した。

「だって今どけていったじゃない。それってあたしが邪魔だって意味でしょ？」

「踏みたいから邪魔だって言っただんじゃねえ！ 教室から出られねえから邪魔だって言っただんだよ！」

「あゝあゝ？ 誰にもの言ってるんよアンタ。誰が邪魔だって？」

「何コイツうぜえ！」

思わず口に出してしまった。でもしようがなくねえか？ ここまで唯我独尊発言をされると感心を通り越すとウザくなってくる。

「星奈さま！ こんな奴は放っておいて次は俺を踏んでください！」

「何を言ってるんだ！ 次は俺が星奈さまの靴を舐めさせて頂くん

だ！」

呆れる程にくだらない口論を始める柏崎の周りの野郎ども。つーかりアルでこんなこと言う人間、初めて見た……。……もうトイレに行くの面倒くさくなっちまったよ……。

もう諦めて席に戻ろうとすると、

「ねえアンタ」

柏崎から声が掛かった。

「あんだよ」

「アンタはあたしを崇めたりしないの？ 土下座すれば足を舐めさせてあげるわよ？」

「お前の足舐めるくらい程度にしか役に立たねえ舌ならいつそ切り落とした方がましだ！」

盛大にツツコンで、自分の席に戻る。

色っぽく言って貰っても何も嬉しくねえよ。つーか足を舐めることが土下座以上の価値があるとは思えねえ。代わりに人間として大事なもんを失う気がする。

変態な野郎どもの変態発言（あいつらは秋葉原に言った方が良いと思う）から時間が流れ、放課後。

いつも通り孤独で家に帰ろうとすると、掲示板の前でなんかやってる生徒がいた。一人が男子、もう一人が女子だ。掲示板の前でやることつつつたらなんかの広告だらうけどさ……。

「うむ。中々の出来映えではないか」

「……なあ、こんなんでも部員集まるのか？」

「集まるに決まっているだろう。それに集まらなかったとしてもだ」

「集まらなかったとしても？」

「このポスターに隠された真意が解らない以上、私の友達になる資格はない」

「友達になる資格つてのを生まれて初めて聞いたよ！」

……仲良く言い争ってんな……。俺は羨ましいのか、それともどうだっていいんだろうか。よくわかんねえけど。

とりあえず邪魔したらまずそうな雰囲気なので、黙って掲示板の前を通り過ぎようとした。

ガッ

何かを蹴るような音。早足で歩いていたら、残りのポスターが置いてあることに気がつかなかった俺は、ポスターの入った袋を蹴ってしまったのだ。

「あ、悪——」

悪いと言おうとした瞬間、

グイッ

「貴様……私の手塩にかけたポスターを蹴るとは……今日が貴様の命日だ」

女子生徒の方に思いつき胸ぐらを掴み上げられた。は、速えー！？ 予備動作なしで胸ぐらつかまれたのは初めてだ。

「い、いやだから悪かったって……」

「悪かっただと……？ 悪かった程度で済むならこの世に戦争などは発生せんわ！」

こ、この女……！ たかだかポスターを蹴っただけが戦争と同義だつてのか！？ なんつー価値観……！

「お、おい夜空^{よぞら}。その程度にしとかないと落ちちまうって」

男子生徒から気遣いの声が掛かる。なんかこの二人どっかてみたことあるような気がするんだが……今はそれどころじゃない。

「良い落ちろ。二度と帰ってくるなリア充が」

「無茶苦茶言つなよ！？」

リ、リア充？ 俺が？ 学校で黙々と飯食って家に帰ってもゲームと勉強と漫画を読むことしかない俺が？ 一昨日レンタルDVDの返却を忘れて、延滞金として三百円を取られた俺が？

こ、このヤロウ……！

「ふざけんじゃねえ！ 俺がリア充なら世界全体がリア充確定だ！」

女生徒の手を振りほどきながら、人生の中でトップスリーに入る程に悲しい台詞を吐きながら、女生徒と向き直る。

「え……。ああうん……。その……。悪かったな……。？」

さっきとはうって変わって優しく声をかけてくる女生徒。……なんだろ、少し、目にゴミが入ったみたいだ。

女生徒を見る。綺麗な黒髪。柏崎よりもきつめな目付き。かなりの美少女ではあるが、目付きの悪さのせいか魅力が半減しているような気が――ぐえっ！

「貴様今、妙なことを考えなかったか？」

「考えてねえよ！ 確信も持ってねえくせに胸ぐら掴むな！」

な、なんて勘の鋭さ……。鼻を鳴らしながら再び解放される。なんつー暴力的な女子だ。よく問題沙汰にならなかったな、色んな意味で。

申し訳なさそうに男子生徒が前に出てくる。

男子生徒には……。なんつーか、やけに凄みがあった。黒の混じった金髪に長身。俺も高い方だけど、もしかしたら俺よりも高いかもしれない。

一言で表すなら『ヤンキー』といった表現がぴったりだ。

「あつと……悪かったな。連れが迷惑かけて……」

インパクトがある見た目に反して、申し訳なさそうな声だった。

「いや、もとはと言えば俺が悪いんだし……」

「そうだぞ小鷹^{こたか}。小鷹が謝る必要はない。コイツが存在しなければ全てうまくいったんだ」

「テメエがあんどこにポスターを置かなきゃ何も起こらなかったけどな」

「なんだ貴様私に意見する気か。話しかけても同じ返事しかない村人Aの分際で」

コイツマジム力つく。

ちらりと二人が貼っていたであろうポスターに視線を移す。

ポスターにはこう書かれていた。

『隣人部』とにかく臨機応変に隣人とも善き関係を築くべくからだ
と心を健全に鍛えたびだちのその日まで、共に想いを募らせ励まし
合い皆の信望を集める人間になろう』

……つまり、何をやるうというのだろうか。隣人『部』ってぐら
いだから部員の募集なんだろうが……。なんか小学生のラクガキみ
たいなのが下にあるけど……。

「……わかったのか？」

「は？」

ポスターを眺めていた俺に女生徒が言った。

「だからわかったのかと言っている」

「いや全然」

お前が言っていることがわからねえよ。主語を入れる主語を。
女生徒は忌々しそうに、

「ちっ……所詮村人Aか」

コイツ俺に喧嘩売ってんじゃねえの？ と言いたくなるぐらいに
弾けた女生徒だった。

そこへ再びヤンキー身なりの男子生徒からフォローが入る。

「字を斜めから読んでみてくれないか？」

「斜めから？」

改行が所々にあり、その字を繋げて行くと――

『ともだち募集』

……。

なんつーか、ここまで間接的な友達が欲しいという意思表示は初めて見た。

「というわけで、入ってみないか？ 隣人部」

というわけってどういうわけだよ。

女子生徒は俺を忌々しそうに睨んでいるが、男子生徒は何故か嬉しそうな表情をしていた。……今までこんな当然の会話をしたこともねえのか——と尋ねるのにも覚悟がいると思うので止めておこう。

「……この隣人って活動内容はどんななの？」

「い、いや……まずは部員からってことで全く決めてないんだけど……」

気まずそうに目を逸らす男子生徒。面白そうっちゃ面白そうだが
……あの女子と毎日顔を合わせるのもなあ……。

「……一日だけ考えさせてくれ。明日にや返事するからよ」

「お、おおっ……？ マジでか？」

なんか感動したような表情の男子生徒。目付きが悪い為、なんか少し怖い。

「一つ言っておくが、まだ決めた訳じゃねえぞ。明日の放課後に——どこに行きゃいいんだ？」

「あ、ああ談話室4に来てくれ。そこが部室だからさ」

「わかった——あーっと……名前は？」

「2年5組の羽瀬川。はせがわ羽瀬川小鷹」

「羽瀬川ね。俺は柊冬馬明日の放課後までにや返事出すからよ」

「あ、ああ！」

ようやく帰れるかと思うと、問題の女子生徒と目があった。

「……みかづき よろひ三日月夜空」

相変わらず不機嫌そうな表情のままの自己紹介。自己紹介つつよりも、単なる呟きって感じだな。

「んじゃ、また明日な」

「お、おう！」

羽瀬川が無駄に大きな声で返事を返して来た。なんか無駄に迫力はあるけど。面白そうな奴だな。

「夜空見たか！？ 転校して来て俺初めて友達っぽい会話したぜ！？」

「ちっ……小鷹の分際で余計なことを……」

「え？ だって部員を増やすんだろ？ だったら問題ないんじゃ」

「うるさい馬鹿」

「お、おいちよっと待てって！」

それにしても……隣人部、ねえ。

心の許せる友達がいれば、俺のあの一歩引いた感じの態度も改善できるのだろうか……。

入部（前書き）

お待たせいたしました。
更新しました。

入部

「へえ。じゃあ今日の放課後は入部届を出しに行けふつくわけかい」

隣入部に入らないかと声を掛けられた日の翌日の昼休み、俺は珍しくトイレに引きこもらずにいた。正確に言うなら引きこもろうとはしたのだが、コレに見つかって職員室で駄弁らされているのだが、ちなみに今の『げふっ』はげつぶだ。喋りながらげつぶをするなんて、ある意味では感心の念すら浮かぶ。真似をする気は全然ねえけど。

「まだ入るって決めたわけじゃねえよ。放課後に見学させて貰ってそのあとで決める」

「そんなことしたら時間がもつたないんじゃないの？ 人の青春は短くて儚いものだよ子羊君」

「誰が子羊だよ。つーか俺より年下の奴に青春云々を語って貰ってもためにならねえんだけど」

俺のツツコミに「あっはっは」と笑う銀髪碧眼のシスター。

……ここ、聖クロニカ学園は名前でもわかる奴もわからない奴もいるだろうが、カトリック系のキリスト教の学校だ。当然、本職がシスターの人間も何人が派遣され、働いているし、授業を受け持つこともある。

その内の一人がこいつ——銀髪碧眼のシスター、高山ケイトだ。半年くらい前にちよつとしたことがあって知り合ったのはまだよかつたんだが、俺が聖クロニカ学園の生徒だと知るや否や、暇潰しの相手として使われるようになった（だからわざわざいつもトイレなんかで時間を潰してたんだが）。

俺の何が気に入ったのかは知らねえけど、職員室に連れ込まれて

話をするのはいい気分はしない。つーか暇潰しに生徒を職員室に連れてくる教師なんて見たことねえよ、こいつ以外は。」

「こえつぶ。ういゝ……やっぱつぶは素でするのに限るねゝ」

シスターのくせにとんでもなく下品なんだが（素でやらねえつぶってなんだ）。

いやまあ、シスターだって何かしら落ち度があるのかもしれないけどさ、ここまで落ち度を露骨に晒されるとどう反応すればいいかわからねえじゃん？ しかも直そうと思ってねえみたいだし。『シスターだって完璧じゃない！』と言う言葉を体現したような教師だよな、今更だけどさ。

「というか、お前俺なんかじゃなくてさ、他の先生と話したらどうだよ。俺の話聞いてても面白くねえだろ」

ケイトに思ったことを率直に言ってみる。しかしケイトは眉間に皺を寄せて、

「あゝ君にはわたしが他の教師と仲良く駄弁る姿が想像できるかね？ できたら私の口をつけたコーラをあげるよん」

「……悪かったよ」

素直に謝っておいた方がいいだろう。

まさか教師の前でもこの下品トークができるとは思えないし、この性格が素であるケイトには他の教師の会話は苦痛とまではいかないまでも、かなり肩が凝るだろう。

「つーか君もなかなか躊躇いがないよねえ。仮にもシスター&教師にお前呼ばわりってどうよ。まあわたしは打たれても喜んだりはし

ないけど」

「お前が年下に敬語はやめろつつったんじゃねえか。まあもしそこまでの変態だったら俺は他人行儀の敬語で喋るけどな」

初めて聞いたときはかなり驚いたが、こいつは俺よりも年下なのだ。

顔立ちもかなり整ってたし……まあ、発育もそこそだったのと同じ年くらいだと思っただけだな。

「くははっ。つれないねえお兄ちゃんは」

「誰がお兄ちゃんだ。見てくれの似てねえ奴にお兄ちゃんなんて言われても鳥肌が立つだけだっただけだ」

「なんだいギャルゲーでわたし似の妹キャラではあはあしてたくせに」

「そんな変態行動は十六年の人生の中で一度たりともねえよ！」

第一、俺ギャルゲーは滅多にやらねえし。

「またまたあ、お兄ちゃんったら照れ屋さんなんだからキラッ」

「……擬音語を口で言うか」

キラッ ってなんだよ……。……コレと釣り合いがとれる教師、

派遣されたりしねえかなあ……。

昼休み無駄に駄弁つたにも関わらず迷い子に手を差し伸べるところか疲労を溜めやがったシスターを恨みつつも無情に時間は流れ、あっと言う間に放課後になった。まあ、迷い子つつつても部活に入部するかどうかなんだけどさ。

「どーすつかねえ……」

意識せずに言葉がもれる。

隣人部——昨日知り合った羽瀬川ってヤンキーっぽい見てくれの生徒が言うには、友達を募集している部活。簡単に言うなら、俺みたいな友達いない奴、もしくは友達が欲しい奴の為の部活だろう。——ふと思い出す。なんで俺があんな態度を取るのか——なんで友達がいないのか……いや、友達を『作らない』のかを。

「……まだ俺は前のことにびびってんのか……」

……気がつくと隣人部の部室であるという礼拝堂の談話室4の前に来ていた。

……やっぱ、あのまんまじゃいけねえよな。

このままでも生活をすることはできる。周りの人達に合わせて自分は傍観、貼り付いた笑顔を浮かべていればいい。そのままいればなんの問題もない。

でも、それは全く面白味のない人生だ。昼間のケイトみたいに心底愉快そうな笑顔を浮かべられず、いつも他人ような顔をしている。……ちつとも面白くない一生を送るより、心底共感でき、一緒に笑える人間が隣にいてくれた方が良く決まってる。

だったら俺は——この嫌らしい癖を治すしかないじゃないか。

「……見学してからにしようと思ってたんだけどな」

今更だが、俺はどうやら羽瀬川に部活に招待されたことが意外に嬉しかったらしい。そんな声をかけてくれる奴、俺の記憶では——多分、いなかった。

ケイトの奴はいらねえ声ばっかかけてくれるけどな。

「——うし」

少し気合いを入れてドアを開けようとすると、

「あれ、アンタ」

透き通るような綺麗な声がかかった。振り返ると——驚け、そこにはいつも男子に囲まれている柏崎星奈がいるではないか。

——隣人部と書かれた入部届を持って。

柏崎星奈（前書き）

思っていたよりも速く更新できました。

柏崎星奈

さて……今一度言うが、俺が今から入ろうとしている談話室4は隣人部の部室だ。昨日羽瀬川から聞いたばかりだから間違いはないと思う。

隣人部は主に友達を作ることが——詳しくはわからないが——目標だ。ちなみに今入部を決めた俺にも友達がおらず、友達がいる人間には縁の全くない部室である。

その部室の前に——柏崎星奈がいる。隣人部の入部届を持って……一体なんの冗談なんだ。

「アンタ昨日あたしに踏まれたがってた奴じゃない。何やってんのよ」

「どの次元のどの時間帯のどの俺がお前に踏まれたがってたんだよ！」

「あれ違ったつけ？」

柏崎が首を傾げる。

コイツ……昨日も少し思ったんだがバカなんじゃねえの？ 学年トップの学力らしいけど、馬鹿と天才は紙一重ってのは事実みたいだな。

俺はその事実を心の底から痛感したよ。

「えーっと……ランタロウだつけ？」

「誰が忍者の卵だよ。柊だつての」

「ふーん、あっそう。まあ下僕の名前なんていちいち覚えてないわよ」

あっさりと告げる柏崎。

この女……俺の名前を知らなかったのはともかく……俺がいつた
いいつお前の下僕になったよ！？ 事実を捏造すんじゃないよ！
でもツツコンでも何かが変わる訳じゃねえし、まずは……あれだ
な。疑問を口にするに限るな。

「……お前何しに来たの？ ここって隣人部の部屋だろ？」

「はあ？ 何間抜けなことやってんの脳みそが耳から出てんじゃないの馬鹿じゃん？」

なんつー容赦のねえ、しかもまるで人間どころか哺乳類以下の生
物を見てるような物言い。ぶっちゃけコイツに踏まれて『ハアハア』
言ってた野郎どもの気が知れない。つーか気が触れたとは思えね
え。

まあ昨日の三日月とか言う奴に比べればまだ我慢できるけど、そ
れでもム力つくもんはム力つく。

そんな俺の心境を無視して、柏崎は告げる。

「もちろん入部しにきたに決まってんじゃない！ 友達募集ってポ
スターを見てね！」

「は？」

大したことでもないのに誇らしい柏崎の言葉に不思議な表情を浮
かべる俺。

今、柏崎はおかしなことを言わなかったか？ いや、入部しにき
たつてのはまだいい。冷やかしのなかそうでないのかはまだセーフ
だ。

問題はその後の台詞。

今確かコイツ、『友達募集のポスター』って言わなかったか？

隣人部のポスターは昨日俺が見たあの種類じゃないはずだ。

まさかコイツ……あの隠された単語を見つけやがったのか……！？
普通の奴は見るだけで入部を考えるだろうに……なんて悲しくて
退屈な奴だ……。

「何かしら。今アンタからとてつもなく不愉快な視線を感じるんだ
けど……」

「正直、どんな表情をすればいいか困ってんだよ」
あのなぞなぞめいた奴に感心すればいいのか、そんなどうでもいい
ようなことに気がついた奴同情すればいいのか……悩みどころだ。
まさか気がつかなかった俺が変だとは思いたくねえけど。

「……かなり釈然としないわね……まあいいわ」

柏崎は仕切り直すように俺の方に視線を向け、心底愉快そうな表情で、

「何？ アンタも入部？ ギャハハッ！ 寂しい奴ねえ一人で暗い
青春街道まっしぐらですかあーっ！？」

う、うぜーっ！

なんだこの女、人の神経を逆撫でするのはもしかしたら三日月以上
かもしれない。っーか！

「その寂しい奴が集るところに入部しに来た奴に言われたくねえんだ
けど。まさかお前、友達がいるくせに入部しようって思ってたんじゃない
ねえだろうな？」

「アンタ馬鹿？ 友達がいたらわざわざ私がこんなとこにあたしが
足を運ぶわけじゃないじゃない」

なんて女王様発言。

ここまで臆面なく言われると頭の正常さが疑わしくなってくる。

「何よその目」

「別に」

俺の同情めいた視線が癪に障ったのか、柏崎が不愉快そうな顔をする。つーか同情されるような頭を持つてんのが悪いんじゃないの？ 屁理屈って言われればそれまでだけどさ。

「というか、ならやつぱお前にも友達いねんじゃないか！ 俺のこと言える義理じゃねえだろ！」

「は？ 何言つてたんの？ あたしが言えない台詞なんて存在しないわよ」

うわぁ……臆面もなく言い切りやがったぞ、このお嬢様。明らかに理屈が通ってないんだが、こんな常識の通らない奴に理屈云々を語っても無駄骨以外の何物でもない。

それにめんどくせえし。

「まったく……隣入部に入部しに来たんだろ？ だったら俺なんかと話してんなよ」

最初は『お前いつも野郎に囲まれてんじゃない』って言おうとしたんだけど、正直疲れた。つーかめんどくせえ。

ぶっちゃけ入部を決めたはずなのに、少し躊躇いがちになってる俺がいる。

「あ、それもそうね。アンタなんか喋ってる暇なんかなかった」

こいつ、もしかしなくても無意識で俺の悪口言ってるんじゃないの

？ だとしたらとんでもなく質が悪いな。

会話するのも面倒になったので、さっさとノックをしようとする。

「ねえアンタ」

そこへ再び柏崎の声がかかった。

何回俺の邪魔をするんだお前は……。

「んだよ」

「アンタ名前は？」

「は？」

名前って……さっき俺言ったよな？

「この程度も察せないのバアアアカ！ 名前って言ったら下の名前に決まってんじゃない」

「そんな決まり聞いたことねえよ！ つーかてめえはいちいち喧嘩売らねえと会話できねえのか！」

こいつ何？ 俺の胃袋に穴を空ける為に生まれて来た存在ですか？
だとしたら神を呪う。

「……冬馬だよ。柊冬馬」

心底不愉快そうに名前を名乗る。
すると柏崎は、

「冬馬……冬馬か……」

何故か俺の名前を噛み締めるように何度か呟き、笑顔で、

「うん。じゃあアンタはあたしのことを星奈って呼びなさい。特別に許してあげる」

——ちよつと不覚だった。

柏崎の笑顔はさっきまで俺に罵倒を浴びせていた奴と同一と思えないほど綺麗で……可愛らしかった。

隣人部（前書き）

お待たせいたしました。
ようやく入部です。

隣人部

「で？ 昨日小鷹が声をかけたヘタレ仲間とはとかく、なんなのだこいつは」

反対側のソファーに腰をかけた三日月がとんでもなく不愉快そうな顔で柏崎を睨む。

ちなみに俺は三日月を睨んでいる。

「あたしが直々に入部してあげようって言ってんじゃない。崇めなさい愚民ども」

「そうか崇めてやるからさっさと出ていけ。そして階段から落ちて死ね無駄脂肪が」

「はん。胸板が平原の奴よりまだと思うけど」

「……よく言った。ならばその無駄な脂肪、焼いて食ってやる。そして焼け野原になるがいい」

……想像を絶する仲の悪さだ。

羽瀬川と俺は二人顔を見合わせ、どちらからとも言わずにため息をついた。

なんで……こうなったんだっけか……。

ことの起こりは僅か数分前。

先ほど俺と柏崎が結構な声で言い争ったりしていたことで、どうやら隣人部の部室の中まで声が響いてたらしい。まあ当然のような気がしなくもねえけど。

それで静かにするように注意するために羽瀬川——三日月に命令されたらしい——が部室から顔を出した。

そして入部することを伝えたら羽瀬川に連れられ、部室に入ってこの二人が面と向かって始めに出た言葉が、

「「ちっ」」

という盛大な舌打ちだった（この二人、社会で絶対にやっていけない気がする）。

そうしてこんな不思議と息が詰まりそうな空間が出来上がってしまったというわけだ。

「っ」かお前ら、俺と羽瀬川に全く遠慮なしで不機嫌オーラを出すんじゃないよ……。

「ていうか夜空、お前らって知り合いなのか？」

齒軋りまでしそうな勢いで睨み合う二人に、羽瀬川が尋ねる。

俺にはなんとなく同族嫌悪って言葉がしっくり気がすんだけど……

…面倒な結果になりそうだから黙ってるか。

羽瀬川の問いに三日月は視線を柏崎から逸らさずに答えた。

「別に知り合いなどではない。単に気に入くないだけだ」

鼻を鳴らして、不機嫌ですと言うような態度を示す三日月。

「……んで、柏崎は？ 三日月と話したことがあるわけ？」

今度は俺が柏崎に聞いてみると、

「ハア？ この女神様であるあたしが、こんな妖怪狐と知り合いなわけないでしょうが」

言葉は違えど、柏崎も三日月と同様に不機嫌そうな態度を崩さない。

ついでにお前が女神だとしたら、世界は何もかもがうまくいかな
えだろうな。

「……だったらお前ら、なんでそんな仲悪いんだよ」

「「気に入らないから」」

羽瀬川の当然の疑問に当然みたいに即答する柏崎と三日月。

……お前ら実はかなり仲いいんじゃないの？

しかし互いにとってそれがますます氣にくわなかつたらしく、

「貴様に氣に入られたくなどないわ下品な乳牛が。牛はどこかの牧
場で乳くり合っている」

「はん、愚民の嫉妬は汚いわね。でも我慢してあげる。崇めなさい
貧乳狐目女」

……お前も三日月ほどじゃねえけどつり目だろうが。

「……私は別に小さくない」

「中途半端な大きさの胸なんてないのと同じじゃない？」

「……自分より胸の大きい女を殺せば相対的に私が巨乳になるな。
私の崇高な計画の生け贄一号になって貰おうか」

「「やめとけ」」

俺と羽瀬川の声がハモる。崇高な計画どころかその過程で牢屋に
ぶちこまれたら全く意味がないと思うんだが。

それともこいつはポリスメンから逃げ切る自信があんのか？

「つーか俺も聞きそびれたんだけどよ、お前いつも野郎に囲まれて
んじゃない。あれダチじゃねえの？」

「あんな友達願い下げよ」

あの野郎どもには残念だが否定できない。

「あれはただの下僕。あたしがほしいのは友達。特に同性の、例えば家庭科の調理実習や修学旅行のグループ分けのときに『好きな子同士班になつて』って言われたときに一緒にになれるような友達よ」

「べつにそこまで詳しく説明しなくてもよかったんだけど……」

お前、『私は友達がない寂しい人間です』って告白してるようなもんだぞ。恥ずかしくねえの？

俺の言葉が届いてないのか、柏崎は悔しげに、

「……『柏崎さん男子に人気あるんだから男子と組めば』ギャハハ」
『なんてム力つく台詞を吐かれないように、あたしには友達が必要なの……！ クラスの余り物だけを集めた班で全く盛り上がりがない修学旅行を過ごすのはもうイヤ……！』

お前さつき、入口んとこで俺にそれ以上の罵倒食らわせてたじゃねえか。

まあ、とりあえず苦勞してるってのはわかったよ。

「……そういえば、あんまりモテすぎたり優秀過ぎる女は同性に疎まれるって話はたまに聞くな」

羽瀬川の言ってることはわからなくもないが、それでも相手も猫を被るくらいのはすんじゃないかな。露骨に嫌がられるのは人格か性格に問題があるからだと思うんだが。

「ふーん、あんたヤンキーのくせにわかってるじゃない。踏んであ

げるから跪きなさい。それとも靴舐める？」

うん、こんな馬鹿発言を素でするから同性に嫌われんだろうな。
っーか男からやけに人気がある意味もよくわからん。顔がよければ性格がねじれ曲がってても構わないってのが男子高校生の常識なのか？ だったら俺は常識から離れた変人でもいいかもな。

「なんで俺がお前に踏まれたり靴を舐めなきゃならないんだ」

「うちのクラスの男子はご褒美に踏んであげたり靴を舐めさせてあげるって言ったら何でも言うこと聞いてくれるわよ？」

「おい、まさかその男子とやらの中に俺も入ってんじゃねえだろうな」

俺の言葉を見殺して柏崎はなぜかびびったような表情で、

「……ま、まさか傲慢にもそれ以上を求めてるわけ？ さすがはヤンキーね……。二、ニーソックスで縛ってなんてあげないんだからね！ この変態！」

「変態はお前だ！」

スパン！

あまりにも常識から外れた言葉に、柏崎の頭をひっぱたく俺。

「な、なにすんのよ！」

「なにすんのじゃねえよ。お前が常識外れな変態なのが悪い」

「あたしにこんなことしてただで済むと思ってるの！？ パパにチクるわよ！」

「あーはいはいもうしわけありませんでしたー柏崎さん家のお嬢様ー」

「ぐくく……全然誠意を感じないんだけど……」

「誠意なんて込めても腹も膨れねえんだからあってもなくてもおんなじだろ」

「あんた最低ね！」

「その台詞をてめえに言われるようになったら終わりだな」

「ぐ、ぐう……」

涙目で痛みを訴える柏崎にあくまで飄々と答える。

「つかこいつ、あれだけ傲慢な性格のくせに打たれ弱いのが。頭ひっぱたいただけで涙ぐむか普通。」

「それにしても……さすが夜空の作ったあのポスターの真意を読み取っただけのことはある……」

「お。やっぱりそう思うか羽瀬川。俺は柏崎があポスターを読んだって聞いたとき、自分がおかしいんじゃないかねえかって思っちゃったが、常識を説けるやつで助かったわ」

「大丈夫だ。絶対読み取れないのが普通だから」

柏崎やらケイトやらと話していたせいか、なんだか普通の会話に感動を覚えている俺がいる。

そこへ柏崎と三日月が不機嫌そうな表情で、

「今の会話からは何故か私を侮辱するような意思を感じるな」

「あたしも遠回りに馬鹿にされてるような気がするわね」

「「気のせいだ」」

ぶつちやけ馬鹿にしてるけどな。

余計なことに気がつく前に話題をすり替えた方がいいかもな。

「んで話は変わるけど、入部届ある？ 職員室に取り行くのめんどくて」

「ふん。ほら、お前のような役立たずのために置いてある」

相変わらず不機嫌そうに入部届を渡してくれる三日月。その内眉間に皺が寄るんじゃないかと思うくらいの不機嫌さだな。

まあ、これはもう癖かなんかだと思っけどさ。

俺が入部届に記入していると、トンでもない眼光で柏崎と三日月が睨み合っただけど……。

そして三日月は鼻を鳴らして言った。

「それでその牛女はいつまでいるつもりなのだ？ 床が抜けるからさっさと出ていって貰おうか」

「ハア？ あんたの脳みそはミトコンドリア以下ですかー？ あたしも入部に来たって言っただじゃない」

「ここは人の友達を作る部活だ。牛の友達は牧場で作れ」

「あんたこそ、キツネの中間なら森ん中で作りなさいよ」

凄え。シャーペン走らせる手を止めるくらいに緊迫した雰囲気だ。

いくら教師にタメ口使ってる俺でも初対面の相手にこんな会話はできねえ。

ついでに気になったことを聞いてみた。

「つーかお前らさ、互いのどこが嫌いなわけ？」

「全部」

おお、見事な息の合いよう。

端からみれば大の仲良しと勘違いしそうだ。

しかし二人はますます不愉快そうに顔を歪ませた。不理解・不愉快・不機嫌の三拍子が綺麗に揃ってるやつらだなあ。

「と、ところで！」

これ以上の言い争いは見るに耐えないと思ったのか、羽瀬川が止めに入った。

「「ああ？」」

見た目が可愛いわりに、凄まじいガンを飛ばす（眼力で何かを破壊できそうなくらい）二人。羽瀬川は躊躇いつつ、

「か、柏崎も本当に入部するのか？」

「入るわよ。入部届も持って来たし」

「……ち」

ぴらぴらと入部届を見せる柏崎に、心底嫌そうに三日月が舌打ちした。お前は柏崎の行動一つ一つに不満をぶつけなきゃ気が済まないのか。

「……なんか文句あるわけ？」

売り言葉に買い言葉というのはこういうのを言うのです、というように見事に表して見せる柏崎と三日月。

「ある。出てけ。あ、違った、死ね」

「あたしさあ、一度言ったことを撤回するのって大嫌いなよね。とはいえ、まさかこんな性格悪い女がいるとは思ってなかったし…」

「…」

「そんなこだわり持つくらいなら常識を養ってくれよ柏崎先生」

「あゝあ？」

「羽瀬川、入部届書いといたけど」

「あ、ああ、俺が預かつとくよ」

柏崎のガンを無視して羽瀬川に届を渡す。ちょっと見てみると、無視されるのが悔しかったのなんか不満そうに柏崎が俺を見ていた。

しかし一転し、手をポンと叩いて、

「そうだ、あんたが辞めればいいのよ！ さすがあたし、ナイスアイデア！」

「この部は私のだ」

「いつから夜空のになったんだ」

「おおさすがヤンキー、俺の部発言か？」

「俺の部発言でもねえし俺はヤンキーじゃねえ！ この髪は地毛だ！」

「へ？ そうなの？」

まあ、ヤンキーだろうがヤンキーじゃなからうがどっちでもいいけどさ。

「あとそのヤンキー」

柏崎が羽瀬川を見ながら言う。こいつ、今言っただけの羽瀬川の言葉忘れてやがる。いや、むしろ聞いてないってのが近いかな？

「あたしのことも星奈って呼びなさい。特別に許してあげるわ」

「……なんでまた」

「このキツネ女が名前であたしが名字だと、あんたの中であたしの方が優先順位が下みたいじゃない」

たかだか名前と名字の違いでここまでこだわりをもつやつを初め

て見た。

「……………わかったよ。……………星奈」

結局、羽瀬川が折れて柏崎のことを名前で呼ぶようになった。

そしてなぜか今度は俺を睨んできた。

まさかまた『踏んであげるから跪け』みたいな発言じゃねえだろうな。だったらポケットに入ってる飴玉を額にぶつけてやる。

「あんたにはさっき言ったはずなのになんで未だに名字なのかしら。あたしが許可してやってるんだから、ちゃんと名前で呼びなさいよ」

許可？ ああ、さっきの名前で呼びなさいってやつの話か。

どっちでもいいんだけど簡単に従うのもなあ……………まあ、うるさくなる前に従っとくか。

せーの、

「わかりましたよ星奈先生」

「……………あんた、あたしを馬鹿にしてんの？」

「馬鹿してるなんて滅相もねえ。星奈先生に対して馬鹿にするなんて、星奈先生に対して」

「あ、あんた一発殴らせなさい！ ムカつくしさっきはたかれた分も返してないし！」

「嫌だね」

とりあえずソファーから離れておこう。

それにしても……………こいつら全員、からかいがいのありそうなやつらだな。

部室ってなんだっけ？（前書き）

大変お待たせいたしました。短いながら急速で書き上げました。

部室ってなんだっけ？

俺が入部した、目的が『友達作り』という隣人部。『ぶっちゃけ友達なんて普通の部活に入部すればできるんじゃないやねえの？』なんて思うけど、そこは突っ込んではいけないことだ（高校二年になって入部するってのも迷惑な話だけどな）。

今日は入部してまだ一日目。だということになんで俺は『失敗した』なんて思ってたんだろうか。

はっはっは。そんなこと決まってるじゃないか。

「この馬鹿胸脂肪菌が！ 貴様が余計なことをしたせいで私があがれなくなっただろうが！」

「きやははっ。バーカバーカざまあみるバカ狐！ それにさっきのであがれたってことはあんたの最後の手札、緑ね！ 冬馬に小鷹、絶対に緑は出すんじゃないわよ！」

「ふん。ウモは色^{U MO}だけでなく、数字が一致してもあがれる。バカみたいに騒ぐな馬鹿。ああすまない。バカみたい、ではなく馬鹿だったな」

「ぐっ……あ、あたしは学力トップだったの！」

「つくづく馬鹿な女だ。馬鹿というのは頭のよさ悪さで決まるのではなく能無しや頭があるのに使わないやつのことを指すのだ馬鹿」

「ぐ、ぐう……」

相変わらず少しキツイ罵倒を食らっただけで泣くむ星奈。お前、なんであれだけの罵倒ができるくせに我慢ができないんだ。

で、結局一位はそのまま突っ走った夜空、二位が星奈で三位が小鷹、そして名前が挙がってない時点でわかる通り俺はビリ。あつはっは誰だよU MOやろうって言い出したの。畜生そうだよこめんね俺だよ！

「貴様……言い出しつぺのくせに驚くほど弱いな」

「あんた、頭使う遊びの才能ないわね」

「……悪い冬馬。俺もフォローできない」

こ、こいつら……一回勝ったくらいでなんてムカつく台詞を吐きやがるんだ……！

「言い訳もいいけど、あんたの手札の枚数じゃ虚しくなるだけじゃない？」

俺の手札の残量、十枚以上。

「うるせえよ！ 頭と運任せのゲームは苦手なんだよ！ 並以上の部室のくせになんでテレビゲーム置いてねえんだよ畜生！」

自分でもびつくりするくらい虚しい台詞だ。クソオっ！ トレーディングカードなら全抜きできる自信があるのに、なんでU M Oには攻撃力とか魔法カードとか罠カードトラップがないんだ！

「しかし……」

不意に夜空が呟いた。

え、その前に俺の呼び方に違和感がある？　しゃあねえじゃん。なんか隣人部員の規則（羽瀬川こと小鷹が言うには『そんなこと聞いた覚えがない』）だとかで名前で呼び合うことがリア充の為の第一歩らしいんだから。

つかリア充ってなりたいてって言うてなるもんじゃなくて、勝手になってるもんじゃねえんだろうか。だってリアルが楽しいだけでリア充になれるんだから。

「やはり違うな。ゲームといえばこんなものでは駄目だ」

言いながら、夜空は^{つり目女}鞆から何かを取り出し、ダメ出しするみたい
に全員に見せびらかした。

「それ、PSPじゃねえか。お前、ゲームなんか持ってたの？」

PSPとはゲームのハードの略称で正式名はプレイングステイツ
ポータブルと言う。ちなみに余談だが、俺は授業中にこれをやつて
いたりもする。見つかつて没取されたこともあるけど、ケイトに頼
み込んで返して貰えるからあんまり気にしないでやってる。

勉強なんて学校に入ったあとは通信簿で一取らなきゃいいんだよ。

「昨日一人でファミレスに行ったら後ろの席がやけに騒がしくて不
愉快だったのだが、見たら四人の高校生がこれをやっていた。どう
やら今どきの高校生の間では、ファミレスとかで携帯ゲームを持ち
寄って通信プレイするのが流行っているらしい」

「一人でファミレス行った上に他人がやってたってだけでそんな高
えもん買ったのかよ。虚しいって意味辞書で調べとけ」

「あ、冬馬危ない蜂だ（超棒読み）」

夜空が蠅叩きを降り下ろす前にソファーから立ち上がって緊急退
避する。前は速攻で胸ぐら掴まれたけど、何度も食らうつもりはね
えよ、痛いし。

蠅叩きの一撃を俺に回避され、悔しそうにしながらも夜空は蠅叩
きを下ろした。その前にそのハエ叩き、どこにあったの？ ハエ叩
きが置いてある部屋っていったい……。

「で、結局それがなんなのよ。言ったことをすぐ忘れる鳥頭じゃな

いんだからさつさと言いなさいよキツネ女」

「あ、蚊だ（さつきと同じく棒読み）」

べちん！

蠅叩き、星奈の顔面に直撃。

「あ、あにふんのよ！」

言葉だけでなく物理的にも星奈は打たれ弱いらしく、また涙目になりながら夜空に抗議した。

「まあ、汚い顔をした肉団子は放っておいて」

「あんたの性格より汚くないわよクソ狐！」

「性格に関しちやお前も人のこと言えねえだろ」

「今日改めて思ったけど、冬馬が入部してくれてとんでもなくよかったって感じがするよ」

「（ギロリ）」

「なんでもないっす」

おお、凄まじい眼光だ。でも星奈はともかく、なんで夜空まで怒るのか。

そして小鷹、さつきの台詞は野郎に言われても全然嬉しくねえから、せめて「助かった」にしてくれ。あえて口には出さないが。

それにしても、この二人捻れた性格してるけど、あの狐目女の度胸は凄えな。もしかしたら単に恐怖を知らないから肝が据わってるように見えるだけかもしれないけど。

「それでだ、先ほどの話の続きだが」

一度咳払いをし、夜空が仕切り直すように言う。
そして悪いがなんの話をしていたか俺は覚えてない。
……本当に大丈夫かこの部……活……？

ゲームをしよう 1 (前書き)

お待たせいたしました。更新しました。

ゲームをしよう 1

昨日の部活(?)から一日が経過し翌日。夜空からの話は正直ほとんど聞いてなかった俺は、今日は部活はやらなくて帰ろうと考えていた。というのに、

「ねーねー冬馬。部室行くんでしょ？」

何故か不安になるくらいの笑顔で星奈が近づいてきた。……こいつの笑顔は人格を知ると、可愛いよりも憎らしいと思いが強くなるのは俺だけなんだろうか。

さっさと帰ろうって考えていたのに面倒な奴に捕まったな畜生。

「……お前、なんかいいことでもあったの？ 気持ち悪いくらい機嫌いいみたいだけど」

素直に疑問をぶつけてみる。正直な話、星奈が可愛い笑顔を浮かべているともの凄く嫌な予感がすんだよね。てか嫌な予感しかない。

星奈は今の台詞を待っていたかのように(案の定、俺の悪口は聞こえていない)、一層可愛いらしい笑顔でPSPを取り出した。つーかなんでPSP……? もしや俺が聞いてなかった昨日の話に係あんのか?

「ふふん。見なさい! あたし、モン狩でランク5になったのよ!」
「モン狩?」

モン狩というのは『モンスター狩人』の略称で、PSP対応のゲームだ。

モンスターを倒して素材を剥ぎ取ったりして、自分の武器を強化していく、という内容だ。

俺も時々やってるけど、あれは数人でやってこそ面白くなるゲームだから、あんまりはまりこんではいけない。……だってやる相手いねえもん。

俺の不思議そうな表情が疑問に思ったのか、星奈が訝しげに、

「まさかあんた……昨日キツネ女に言われたこと忘れたワケ？」

「馬鹿言っなよ。そんな表情に見えるか？」

「見える」

「ふっ……だとしたら星奈には表情を読み取る才能はねえな」

「何よ、違っつての？」

「全く違う。……忘れたんじゃないって覚えがない」

「それ忘れる以前の問題じゃない！」

うるせえな。俺の脳の容量はゲーム専用だ。どうでもいいことを覚えるくらいなら、サブイベントの発生条件を覚える。

でも呆れられたままも癪に障るし、仕方がなくこの世で貴重な腐敗した脳みそを必至に動かして、昨日の会話を思い出す。

………ああ、そっぴやなんかそんな話してたな。

トレース オン
回想………開始！

『明日の部活でPSPとモン狩を持つてくるように』

『持つてない場合とかはどうすんだよ』

『？ 当然購入してくるに決まってるだろう』

『……なあ小鷹あ。俺の疑問って疑問顔で返されるくらい当然なモンなのかなあ……』

『……この部活では非常識を習う必要があるからな……』

トレース オフ
回想、終了……。

え？ 回想がやけに短く感じる？ はっ！ 俺の脳みそで会話全部を思い出せるわけねえだろうがよぉ！

「はぁ……それでなんなんだよ」

「なんであんたそんなに反応薄いのよ！ ランク5よ！？ 最高ランクよ！？」

「んなこと言われてもな……」

凄いとは思うけど……。

モン狩には狩人のラン克蘭クが設定されていて、その最高が5とされている。5までランクを繰り上げるには相当なプレイ時間を要するんだけど、それ以上に不思議なことがある。

「つーかお前、ゲームなんか持ってたの？」

それがランク云々よりも疑問だ。

星奈は何故か偉そうに、

「クラスの男子に貰ったのよ。ソフトと一緒に。確か名前は……猿飛佐助？」

「お前今すぐ全国の歴史ファンの人達に謝れ」

オタクと猿飛佐助を同列に考えるアンポンタンが世界に存在するとは……。世の中予想がつかないことだらけだ。

まあ、今となってはゲームをただで貰う、なんて非常識な台詞を言われても驚きはしないけどさ。

「つーかまがりなりにもただでゲーム貰ったんだから、名前くらい覚えといてやれよ」

「しょうがないじゃない。あいつら、全員顔が同じに見えるんだも

ん
「……………」

こいつ、自分にとってどうでもいい人間は全員通行人扱いか。相変わらず非常識極まりない奴だ。

「そんなことより早く部屋に行くわよ！ 夜空と小鷹にも見せつけてやるんだから！」

「うええ？」

「何よその他人に自分の部屋を我が物顔で使われてるみたいに嫌そうな顔は」

なんて現実感のある例えだ。実際、今の俺の表情はそんなに嫌そうな顔をしているんだろう。だって星奈と夜空と一緒にゲームって嫌な予感しかしねえもん。

ソフトは一応飽にはあるけど。

「いいから来なさいよ！ そしてあたしの神プレイに跪きなさい！」
「ちよつ、わかったから離せ！ お前自分の立場わかってんのか！？」

「？ あたしの立場？ そんなの女神に決まってんじゃない！」

不必要に胸を張って断言する自称女神（端からみるとイタすぎる人）。

それに俺が言いたいのはそんなイタ発言じゃねえよ！ 視線が！
ウチの腐りきった男子から殺意と嫉妬の眼差しが！

ここまで注目を浴びたのは生まれて初めてだぜ！ だって言うのに全くうれしくないどこか絶望を感じるのは何故だ。

「ぐひひ…… 夜空の右脳と左脳を叩き割るチャンス……」

教室から出ても四方から殺気を感じる俺は、星奈の不穏すぎる
気が聞こえていなかった。

ゲームをしよう 2（前書き）

お待たせいたしました。更新です。もう少し長く書こうとしたのですが、そうすると来月までかかってしまう気がしたので短いまま投稿しました。

ゲームをしよう 2

星奈に手を引かれるまま、隣人部の部室である談話室4に足を運ぶ。目え盗んで帰りにえなあ……。

俺と星奈が最後だったみたいで、小鷹と夜空はもうすでにソファの上でくつろいでいた。

「女王様のご降臨よ庶民共！ 跪くことを許可するわ！」

お前、部室に入って第一声がそれかよ。自分を女王様って自称するだけで充分イタイのに……相変わらず、色んな部分に拍車がかかってるぜ。もちろん悪い意味で。

「黙れ肉団子空気が汚れる上に部室が油臭くなる。今すぐ呼吸を止めるかこの世から退室しろ」

「あんた順序でたためじゃない！？ 普通部室から出てけが真っ先に出てくるでしょ！？ しかも選択肢が死ぬ一択じゃないじゃない！」

「そう感じたなら幸いだ。わかったら今すぐ死ね。言語が理解できている内に死んだ方が幸せだぞ？」

「どうしてあんたは優しい顔でそんな外道な発言ができるの！？ 思わず感心しちゃったわよ！」

夜空のとんでもない罵倒に怒鳴り返す星奈。しかし感心したと言っているわりに、若干目に透明な雫が溜まっているように見えるのは俺の気のせいなのだろうか。

「お前さ、泣くくらいならもう少し大人しくなってみようとか思わないワケ？」

「何言つてんのよ。全てが完璧なあたしがなんでそんな心掛けしなきゃなんないの？」

「それはお前が考えて後で俺に答えを聞かせてくれよ。マトモな答えは期待してねえけど」

まさか誰でも感じるような疑問を理解できないって表情で返されるとは……どこまでも計り知れない器だぜ、柏崎星奈。

「っーか星奈、お前高校生なんだからもう少し泣くの我慢しろよ。」

……なんかお父さんみたいな台詞が浮かんだけれど、めんどくさいから声に出さなくていいや。ダルいし。

部員同士の会話とは思えないやり取りを眺めつつ、俺もソファに腰掛ける。……ここまで来たらもう適当にやってやらあ。星奈と夜空の目の前で帰ろうとしたら明日ぐらいにストレスでマジで胃袋に穴空きそうだしな。

「操作とかは予習してあるな？」

取り合えず全員が腰を下ろしたことを確認すると、夜空がそう言っただ。

「ああ」

小鷹が簡潔に答える。まあ、俺はちよくちよくやってるから練習なんかは必要ねえけど。

「ふん、忙しかったけど仕方ないからちよつとだけ試しに遊んであげたわ」

「ちよつとだけって……お前、さっき教室でランク5だとか言っただけじゃなかったっけ？」

「「ランク5!?!」」

なんか小鷹と夜空が驚いてるけど、あっちは放っておこう。

ちよつとだけ遊んでランク5になれるわけがない。モン狩はクエストをこなしていけばランクは上がるけど、難易度が高いクエストになってくると一時間近く掛かる物もある。

ちよつと程度遊んだだけでじゃランクはそこまで上がらねえはずだけど……こいつもしかして……。

「お前……まさか徹夜してゲームやってたのかよ」

「そ、そんなわけないじゃない！」

あわてふためく星奈の姿が痛快だ。たまにはストレスも発散しないと割に合わねえしな。

と、そんな感じで焦っている星奈に夜空が近付き、

バツ！

てな感じで星奈の手のPSPを奪い取った。なんて手際の良さだ。

「ぶ、プレイ時間二十五時間だと……！？」

「ぶっ！二十五時間！？」

やべっ！ 思わず吹き出しちゃった！

つーか二十五時間で、昨日家に帰ってからほとんどゲーム起動しっぱなしだったんじゃないか？

いや、それよりもたかだか二十数時間でランク5にできた星奈の意外な才能に仄かな憧れを抱かずにはいられない。くっ……こいつ、ただの傍若無人・唯我独尊・ナチュラルナルシストな奴じゃなかったのか！？

しかも完徹の上に、授業中にまでやらねえとそこまでのプレイ時間にはならないはずだ。

柏崎星奈さん……君の『ちよつと』は凡人の俺の物差しじゃ計れねえよ。

もちろん実物の物差しじゃなくて、心の物差しだ。

「しかもなんか知らないアイテムいっぱい持つてるし！ 装備も可愛いし！ 生焼け肉のくせに生意気だ！」

何その勇者のくせに生意気だみたいな理不尽、かつ負け惜しみの発言。夜空さん、気に入らないことがあるとすぐに罵倒する癖、直しかねえと近い将来に絶望することになると思いますぜ？ アドバイスを罵倒で返すような奴だから、口には出さねえけどさ。

ついでに言うと、生焼け肉はモン狩に登場するアイテムで、肉を焼いている最中に、中途半端なタイミングで火から離すと手にはいるアイテムだ。当然、半生だから食べると腹を壊す。

「なあ冬馬……」

夜空が星奈のPSPを投げ飛ばしたり、それを受け止めた星奈がテーブルの足に脛をぶつけて悶えている間にソファでPSPを靴から取り出そうとしていると、小鷹が声をかけてきた。……前置きがやけに長かった気がする。

「なんだよ？」

「なんか……今更なんだけどさ、これって人選ミスじゃね？」

はっはっは、小鷹君？ 人選ミスってるのはゲームのパーティーメンバーよりも先にこの部員だつてことに未だ気づかないかね？

正直、近い内にお前もあっち側に行つちまいそうで不安だよ。

……今の不安は、この面子でゲームなんかをやることだけだな。

ゲームをしよう 3 (前書き)

お待たせいたしました。いつもより少しだけ長めです。

ゲームをしよう 3

ゲームに入るまでに相変わらず一問題があつたけど、取りあえずはゲームスタート。

ちなみにホストは星奈。言葉のニュアンスでゲームをやらない奴でも大体はわかるかもしれないが、一応ついで説明にとくと、ホストつつーのは、トランプで言う親みたいなもんだ。

そしてホストになった奴がクエスト——つまり、その狩の目的みたいなものだ——を受注する。本来は一人でそのクエストをこなすんだが、通信してやる場合は、ホストが請けたクエストを他の全員も一緒に参加できる。簡単に言つとクエストの達成率を上げられるわけだ。……まあ、協力者が弱かつたら足手まといにしかならねえとも言えるが。

狩人ランクが高ければ当然、高ランクのクエストを受けられるし、クエストのランクが高い方がレア度の高い素材が手に入る。

その為、ホストは最もランクが高い奴——この面子では星奈がやった方が良さんだけど、夜空のアホが納得しなかつたからなあ……。

「冬馬、なんかやる前から疲れた顔してるけど、大丈夫か？」

「……いや、良いんだ。この面子に協調性を望んだ俺が馬鹿だったんだよ……」

「いや待て。その言葉は俺が納得できないんだけど……」

「ほら小鷹、余所見してつと雑魚に食われるぞ」

「あ、うん、悪い」

前置きが長くなったが、一先ずはスタート。

このゲームではプレイヤーの分身となる主人公の姿を自分で決めることができる。ようは性別を初め、声とか顔とか髪型とかを自分

で決めることができるのだ。

俺のキャラは――

「アンタのキャラ、なんでこんなに老けてんの？」

口の周りに髭を生やした長身のおっさんだった。名前は適当につけたから『ZXP』なんて意味のわからない、もとい、意味のない名前だ。

「冬馬はこんな仙人みたいなヒゲ親父に憧れているのか？ だとしたら諦めろ」

「貴様ら！ 老けてるとはなんだ！ こんな渋くてかけーオヤジ、世界じゃ存在しねえぞ！」

「ふん」

まるで陸で生活するイル力を見ているくらいに理解できないと言った表情の星奈と夜空。このダンディズムを理解できないとは……なんと哀れな。

ちらりと小鷹のキャラを見てみると、

「……小鷹。夢は大きい方が燃えるよな」

「なんで俺を名指しでそんな台詞を！？ わかってるよキャラだろ

！ 少しは夢を見たっていいだろ！」

「少し？」

「……」

愉快そうに声を揃える悪魔せなごま二人。まるで深海みたいに小鷹の周りの空気が重くなった気がする。

小鷹のキャラは、なんか金髪でロン毛とやけに格好良かった。ちなみに名前は『ホーク』。若干目付きが悪いのは小鷹の拘りか、そ

れとも自重したのか。

「つーか夜空さんさ、お前人のと言えるワケ？」

夜空のキャラの名前は『NIGHT』。多分自分の『夜』からだろう。顔や髪、外観だけなら夜空と大差ないんだが、唯一顔だけが全く一致しない。

何この夜空と似つかない愛らしい瞳。それにお前、こんな可愛い笑顔浮かべたことねえだろ。

「なんだヘタレ。何か文句でもあるのか？」

「別にい？ 目付きが悪いの、気にしてんだなあって思ったただだよ」

無言で振り下ろされるハ工叩き。それを小鷹の鞆でガード。

「くっ……」

悔しそうに顔を赤くしている夜空。

「お、俺の鞆……」

そして悲し気な声を漏らす小鷹。悪い。手元にあっから……。

「全く、なんであんた達はそんな不憫なのかしら。完璧すぎるあたしの魂をわけてあげたいくらいだわ」

どこまでもイラつく金髪だなこの女。

星奈キヤラは、星奈を画面に映したらこんな風になるんじゃないかと思うくらいに本人にそっくりだった。しかも名前まで『星奈』。

どんだけナルシストなんだよ、お前。

「そうだな。こんなに見ていて不愉快なキャラ、貴様に相応しいじゃないか。思わず本人と間違っつて斬り殺してしまいたいそうだ」

「全くだ。外観だけでストレスが溜まるなんて、星奈くらいしかできねえよ。恐れて入ります柏崎さん」

「なんで自分に似せただけでこんなに言われなきゃならないの!？」

なんだよ、嫌なのを我満して夜空と意見合わせて褒めてやったのに。注文の多い奴だ。

キャラを罵りあつてんのもいいけど、このままじゃ時間が勿体ない。

「いい加減行くか。小鷹はなるべく裏にいた方がいいんじゃないの? 初期装備のままじゃ二発くらいで死ぬと思っぜ?」

「ああ、わかった」

「じゃあ俺が先頭で行くか。一応、俺もランク5だし」

星奈が先頭でもいいんだけど、俺の方が長い間やつてるし、装備も若干だがランクが上だ。

星奈と夜空も文句はないようで、特に何も言わなかった。多分盾代わりにしようとか考えてんだろうけど、簡単に行くと思うなよ。

「よし、行くぞ」

狩の始まり、だと思った瞬間。

『星奈』の大剣が『夜空』の背中をぶった斬っていた。

「はあ!？」

夜空の素っ頓狂な悲鳴も納得できる。俺も思わず吹き出しそうになった。……一瞬愉快な気持ちになったのは気のせいに違いない。ランク5プレイヤーの大剣の一撃は半端じゃなかったらしく、『NIGHT』、即死。

画面が暗転し、スタート地点に戻された。つかスタート地点から数歩しか動いてねえんだけど。

このゲームはモンスターだけでなく、味方プレイヤーキャラからの攻撃にもダメージ判定がある。正直な話、当たり判定はともかく、ダメージ判定は絶対になくした方がいいと思うんだけど。

そして全てのプレイヤーが合計で三回やられるとクエスト失敗となり、村に戻される。

まだ始まって数分なのに1ミス。

「なにするんだこの肉！」

「あは、ごめんごめん。ちょっと操作をミスしちゃったわ。さ、気を取り直して狩りに出掛けましょう」

なんて白々しさ。

ランク1の小鷹ならともかく、5の星奈が今更そんなミスするわけねえだろ……。

「冬馬……。なんか嫌な予感がするんだけど」

「今更何言ってるんだよ。あ、あと小鷹はあの二人の間に入ったりすんなよ。俺はともかく、お前は一撃で死ぬだろうし」

「まあ、そんなことはしないけど、冬馬が止めてくれるのか？」

「は？ 俺が？ なんで？」

「……ああ、いやなんでもない」

なんで俺があんなバカみたいな喧嘩に巻き込まれなきゃならんだ。

「……操作ミスなら仕方ないな……じゃあ、行くか……」

感情を押し殺したように言う夜空。ってどこ行くんだ？

「おい、そっち行っても行き止まり——」

「あー、ボタン間違えたー（超棒読み）」

俺の声に重ねて、『NIGHT』がボウガンをぶっ放した。
頭蓋に直撃。血が吹き出し、ぱたりと倒れる——『ホーク』。

「なんで俺がああああー!?!」

しまった。俺が最後尾をついてこいつて言ったから、小鷹のやつ、
星奈の後ろについてたのか。

ボウガンの射線上にいたから直撃したみたいだな。……星奈の代
わりに。

「す、すまない小鷹。肉を狙ったつもりだったんだが」

「ってやつぱりあたしを狙ったのねあんた!」

「ああいや間違えた。ボタンを押し間違えてしまったんだ。すまな
かったな小鷹」

なんて言い争っている間に画面が暗転、再び……じゃなくて三度
スタート地点。

つーかこのままじゃ埒があかねえな。

「つーかお前らさ、余計な手え出すなら二人だけでやれ。特に夜空。
言い出しっぺのお前が真面目にやらねえでどうすんだよ」

呆れた風に夜空と星奈に言う。
しかし二人は不思議そうに、

「何を言っている。私は真面目にやっているぞ」

「あたしだってふざけてなんていないわよ」

「「本気で——夜空^肉を狩ろうと思ってる」

あ、ダメだこいつら。

なんつーか、人として。

そして睨み合う馬鹿二人。

「今あたしを狩るって言ったわね！？ このクソギツネ！」

「ふん。貴様に言われたくない。ってああっ！」

夜空がいきなり大声を出した。

なんだよ一体、と思うよりも前に気がついた。

ゲームの画面が真っ暗になってます。そして村に搬送される俺の

キャラ『ZXP』。

いつの間にかゲームオーバーになってるよオイ。間違いなく『星奈』が会話の最中に『NIGHT』をぶった斬ったんだろう。

「貴様……肉……」

「なんか文句でもあん馬鹿ギツネ……小鷹の仇とっただけじゃない……」

頬をひくつかせる夜空と星奈。

あの……普通その態度は俺と小鷹がとるもんじゃねえのか？

「なあ……俺は気にしてないから、みんなで協力しようぜ、な？」

「おお……ヤンキーな見た目に反して懐が深いな、お前」

「ヤンキーは余計だ！」

あれだけのことをされて怒らない小鷹に感心せずにはいられない。俺だったら間違はなく二人と同様、殺しにかかるだろう。

星奈と夜空は意外にも頷き、

「……そうだな、次の狩りは協力して頑張ろう」

「……ふっ、ランク5の天才美少女ハンター様がゴミカスハンター
のあんたを助けてあげるわ……感謝しなさいよね」

「一体どこに天才美少女なんかがいるんだ？」

「ああ？」

「さあ始めようぜ。早くしろよ自称美少女」

怒りの矛先を俺に向けられるのは迷惑なので、さっさと始めてしまおう。

そしてゲームスタート。

「死っねえええええ——ッ！」

どこまで短気なんだお前は！

僅か三秒で味方^{味方}に斬り掛かる星奈。せめて取り繕えよ！

「ふんっ、バレバレだ！」

『NIGHT』は横に転がって『星奈』の大剣を回避し、距離をとってボウガンを連射。

一本の矢は腹に直撃したが、星奈はそれ以外を全てかわし切った。距離を詰めようとする『星奈』だが、どこことなく動きが鈍い。いや、鈍いどころかふらついてんじゃねえか？

まさか痺れ毒！？

「ちょ、えっ！？　なんで麻痺になってんのよ！？　味方に毒矢撃つなんて信じられないバカじゃないの！？」

その味方に斬りかかるお前はバカじゃねえのかよ。
悲鳴を上げる星奈に夜空はとんでもなく愉快そうな顔で告げる。

「私はお前を味方だと思ったことなど一瞬もない。お前は——ただの肉だ」

「くっ、この——！」

「あっ、おいコラ！」

突然星奈が俺のPSPを奪い取った。この野郎、もしかしなくても俺の『ZXP』を身代わりにするつもりか！？

「あっ、おい冬馬馬鹿！　邪魔だどけ！」

夜空が理不尽な暴言を吐いているが俺にはどうしようもない。だってゲームが手元にないんだから。

「いい加減——返せこのド馬鹿女！」

力づくで星奈からPSPを奪い取る。しかし遅かったらしく、俺のキャラは地面にうつ伏せで倒れていた。

「あんたもたまには役に立つじゃない。まあ、盾代わりにしかならなかったけど、褒めてあげるわ」

こ、このクソ女……！

「このヘタレ！ 貴様のせいで肉を狩れなかったではないか！」

「ああ！？ なんて俺に言うんだよキツネ目女！ 文句はあっちのド馬鹿に言え馬鹿！」

「死ねえええクソギツネエ———！」

再スタートするなり言い争う夜空に斬り掛かる星奈。だが——

「デメエこそ死ねクソナルシストが——！」

「んなつ——？」

がら空きの背中に俺の『ZXP』が双剣で斬り掛かった！

ズバシユ、という音が連続して響き、最後の一撃で『星奈』を吹っ飛ばした。クソっ！ 双剣は連続攻撃の数と攻撃動作の速さが魅力的だが、攻撃力が大剣や達などに比べて低い。

残念ながら殺し切ることはできなかったみたいだ。

「冬馬あんた何してくれんのよ馬鹿！ このフユウマ！」

「誰がフユウマだこのクソ女！ さっさと死ね！」

何か引つ掛かるものがあつたが、そんな微妙な引つ掛かりよりも俺には優先することがある。勿論、このKYを殺すことだっ！

と、『星奈』が大剣を振るうよりも早く踏み込む『ZXP』。もらつたア！

「ってなんだこりゃあ——？」

『ZXP』と『星奈』の足下に電流が流れて、二人の動きを縛っていた。

『星奈』には罨を仕掛ける余裕なんてなかった。『ホーク』はこんな効果な罨を持つてとは思えない。残ってるのは……！

「……ふっ。二人仲良く死ね」

俺の『ZXP』を死亡直前まで矢で撃ち抜いたあと、最後は『星奈』を撃ち殺した。

もはや見馴れたスタート地点だ。

「このクソギツネ……狩ってやる……！」

スタートと同時に『NIGHT』に向かって走り出す『星奈』。その『星奈』を再び背中から斬り伏せる俺の『ZXP』。

「はあ!？」

今度は『星奈』を邪魔だと蹴り飛ばし、双剣で『NIGHT』に斬り掛かる。

「自分が大好きなナルシストは地面でも舐めてるバアカ! 死ねキツネエ——ッ!」

「はっ! 死ぬのは貴様だこのオヤジキャラが——!」

ボウガンによる攻撃をかわしながら、『NIGHT』に接近する『ZXP』。あとちよつと——と思ったらトラバサミに引っ掛かった!

「トラバサミ!? お前のランクじゃ貴重なアイテムをこんな簡単に使うのか!？」

このキツネ、一体どこまで他人を狩ることに徹底してるんだ!? とその瞬間、立ち上がった『星奈』が『ZXP』と『NIGHT』

をもろとも叩き斬ろうとしてきやがった！ 横に転がって回避する
『ZXP』と『NIGHT』。

「この肉……挽き肉にしてやろう……！」

「お前らまとめて鬼神化してぶった斬ってやる……！」

「畜生風情が神に挑んだことを後悔させてあげるわ！」

今ここに、三つ巴の戦いが始まった。

「お、おい冬馬、落ち着けって——」

「うるせえヤンキー擬き。もう俺は我満の限界なんだよ」

「ヤンキー擬きってなんだよ！」

小鷹の声を無視して、斬り掛かる三人のプレイヤーキャラ。

「無様にのたうち回って死ね！」

「腸をぶち撒けるバカギツネにヘタレ野郎！」

「理想抱いて溺死しろクソツタレども！」

もはやゲームタイトルの意味を無視した戦いが繰り広げられる。

……正直、俺は帰らなかったことを後悔している。得たものはストレスだけ、なくなったものは多少のアイテム。

そうして俺の熱が冷めたあととも星奈と夜空の戦いが続いたが、俺は小鷹にゲームを預けて戦線を離脱した。

家に帰った後、爆睡したことは言うまでもない。

後日談。

クラスの連中が『2年5組の羽瀬川小鷹がカツアゲしている』なんて噂をしていた。

小鷹……お前、本当はやっぱヤンキーなんじゃねえの？

ゲーム再び 1 (前書き)

先月の地震の影響で、今まで執筆できませんでした。短いですが、楽しんでいただければ幸いです

ゲーム再び 1

「冬馬！ 部室行く？ 行くわよね？ 行くて決定！」

「だあー！ うぜえな金髪アンポンタン！ お前は黙ることができねえのか！」

ようやく放課後になり、憂鬱な授業から解放（ちゃんと受けてるかどうかが問題じゃないはずだ）されたと思ったら、案の定星奈の馬鹿に捕まった。そしていつも通り四方から殺気を感じたりもします。勿論野郎共から。すげえな、俺ついに漫画みたいな特技会得しまつたよ。人間、その気になれば殺気も感じれるんだなあ。

「で、なんの用だよ。ウザいから三文字以内で答える」

「あんたあからさまにあたしの話聞く気ないでしょ！？」

「なんだよ、お前の話つつたら自慢話か夜空に関する愚痴じゃねえか。会話に付き合ってやるだけでもありがたいと思えよ」

聞いてて面白い話でもないし、というかむしろイライラしてくるんだよね、コイツの話し方。いちいち一言喋る度に馬鹿笑いするし。

「それで結局なんなんだよ」

欠伸を噛み殺しながら用件を尋ねる。

面倒なことは早めに済ませたい。『コイツに関わることは面倒なことじゃないの？』みたいなKY的な質問はなしの方向で。

「この荷物を部室まで運んで欲しいのよ」

「ヤだ」

「即答！？ ていうか用件聞いといてそれってあんまりじゃない！

「？」

「うむ、なかなかの突っ込みだ。コイツ、ボケキャラかと思ってたけど、意外と二刀流も行けるんじゃないだろうか。」

「まあそれは冗談として——別にそれくらいなら構いやしねえけど、中に何入ってるの？」

星奈の運んで欲しいと言うのは単なるスポーツバッグだ。コイツが進んでスポーツなんぞをするとは思えないから、中身はスポーツとは全く関係ないものだろう。

「というかスポーツするにも相手がいないか、友達いないんだし。」

「中に何が入ってるか聞きたいの？ ふふん、教えてあげても良いけどお。」

「あ、やっぱりいいや」

「なんで！？ 一秒前までは知りたくて死にそうな顔してたじゃない！」

俺はそんな脆弱すぎる精神は持ってない。

「いや、教えて貰ったらお前が喜びそうだから」

「何あんた、あたしが喜ぶ顔見たくないから教えて欲しくないワケ？」

「馬鹿言つなよ。俺がそんなに陰険な性格——じゃないとは言わないが」

「陰険を自称する奴なんて初めて見たわよ」

俺も陰険を自称するのは初めてだよ。

「まあいいや。部室に運べばいいんだろ？」

スポバを肩に掛ける。む、なんか結構重たいぞ。どうせ下らないもんだと思ってたけど、本当に何入ってたんだ？

「あ、ちよつと待ちなさいよ！ あたしも行く——って待てつつんでしょ！」

聞こえません。

キミの隣にしていると良いことが全くないので俺は先に行かせてもらいます。

我等が誇れない隣人部の部室に到着すると、星奈は俺が運んで来たスポバの中からある物を取り出した。

「なんだよコレ……」

『それ』を見た俺の第一声がそれだった。……別に洒落を言った訳じゃねえよ。

俺の言葉を聞くと、星奈は馬鹿を見るみたいな表情で告げた。

「これはプレイングステイツという文明の利器よ。電器で動くわ。あつ、電器って分かる？」

ほう。なかなか面白い冗談を言ってくれるじゃないか。面白過ぎて頭蓋を叩き割ってしまいそうだ。

だが俺はそんなことはしない。当然だろう？ 俺がそんな悪人に見えるか？

「よし。それでどうやって遊ぶんだこのゲームは？ 取り合えず窓から投げ飛ばしてみるか」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！ あんたゲームって分かってるなら遊び方だって分かるでしょうが！」

チツ、勘が鋭い。有無を言わず叩き壊せばよかったか。いやむしろ、売っぱらって俺のゲームのための資金にするべきだったか？

「まあ冗談はさておき、なんでP S …… といつの間にかテレビなんかを持って来たんだよ」

「冗談なら窓に手を掛けるな！ それにゲームを下ろしなさいよ！」

窓から俺を引き剥がそうと必死になっている星奈。いつの間にか見ない物が置いてあると思ったら、なんでテレビなんかが置いてあるんだ？

まあゲームを持って来たのは星奈な訳だから、テレビを持って来たのもコイツなんだろうけど。

「なんか賑やかだな、何やってんだ？」

「ふん、肉とほうれん草は少し黙ることができないのか？」

俺達が不毛（？）な争いをしていると、いつの間にか小鷹と夜空^{キツネ}が到着していた。誰がほうれん草だこの陰険サディスティックギツネ。

ゲーム再び 2

さて、改めて状況を説明しようか。

隣人部の部室に新たに追加されたテレビとP.S。星奈の馬鹿が持つてきたつてのはわかったけど、前にゲームやってろくな展開にならなかったこと、忘れてんじゃねえだろうな。

正直な話、小鷹以外の二人とは絶対にゲームしたくねえんだけど。ストレス以外得なもんがねえし……っか、ストレスって得なもんじゃねえか。

「なんでわざわざ部室でゲームを？」

星奈にさっきの俺と同じ台詞をぶつけられた小鷹はジト目で星奈に尋ねる。

でかい声では言えないが、小鷹がジト目になると凄まじく怖い。ヤンキーに脅されている気分になる。

「あんなクソゲーじゃなくて、ちゃんと部活に役立ちそうなゲームを——ってちょっとあんだ！ あたしのゲーム何勝手に見てんのよ！」

「あ？」

小鷹と話していたはずの星奈は、何故か俺に怒声をぶつけてきた。俺は単に、ソファアに置いてあったビニール袋があったから、見てみただけなのに。

「『ときめいてメモリーデイズ7』？ なんだギャルゲーじゃねえか。どうせならロープレ持って来いよ金髪ナルシス」

「あたしが悪い訳じゃないのにすっごい言い種！」

驚いたような声を出す星奈。いかん、部員のキャラが濃すぎるせいか、若干俺の言葉使いに以前よりも容赦がなくなってきた気がする。まるで距離が縮まったみたいで、正直あんまり嬉しくない。だってナルシストな上、俺のストレスを過剰摂取させる奴だし（夜空ほどじゃないが）。

「ふん、どれ？」

「あつ」

俺が手に持っているゲームソフトを夜空がかっぱらった。不覚にもラノベとかでよく見る、女の子が変な所を触られたような声を出してしまった。

自分でも気持ち悪い。

俺が悶々としている間に、夜空がパッケージの裏に書いてある字を読み上げる。

「大人気美少女恋愛シミュレーションゲーム『ときメモ』待望の最新作びつくりびつくり。合計七人の美少女達と仲良くなってバラ色の学園生活を送ろうびつくりびつくりびつくり」

「一エクスクラメーションマーク《！》まで律儀に読む必要なくね？」

「前から思ってたけど、小鷹の突っ込みって、なんつーか、当然すぎるっつーか捻りがなくてつまんねーよな」

「芸人じゃないんだから捻んなくてもよくね!？」

いや、別に構わねえよ。だからそんなショック死するような顔すんなよ。罪悪感を三段跳びしてなんかすげえ怖い。

「モン狩なんかよりよっぽどこの部の活動に相應しい内容でしょう

？」

「どこが？　そもそもゲームとリアルを重ねんじゃねえよ。入学のパンチライベント自体、リアルには存在しないじゃねえか。架空の幻想を見本にするくらいならお前は自分の性格を見直せよ」

「あ、あんたねえ！　ゲームの知識でもその場で役に立つ事だってあんのよ！」

一体どんな状況になったらゲームの知識が役立つんだろうか。少なくとも、俺は毎日ゲームをやっているのに日常生活に役立つたためしはない。脳トレとかならともかく。

つかギャルゲーの知識を一般の生活で活かそうとすんじゃねえよ。キミは自称ゲーム世界の神ですか。

「仮に役立つとしてもさ、俺達がやる意味はねえんじゃねえの？」

「？　どういう意味よ？」

「だってギャルゲーって恋人作るゲームだろ。友達とは別のモンじやん。それに大抵のギャルゲーは『幼なじみ』だのなんだのって妙な属性持つてるし、出会い自体に何かしらインパクトがあるし」

俺がギャルゲーの知る限りの知識を披露していると、何故だか三人は意外そうな顔をしていた。夜空に至っては多少引いているような感じもする。

「冬馬お前、やけに詳しいな」

「は？　いや、ゲーム雑誌とか読んでればギャルゲーやらなくてもある程度の知識はつくだろ」

「それ以前にあんたがゲーム雑誌とか読んでるってのが意外よ。なんていうか、似合わないし」

オイコラ。それは俺が年不相応に若干童顔だってこと言ってるの

か。

まあ別にいいけど。

「そういえば、冬馬もモン狩、結構上手かったよな。もしかしてマニアってやつなのか？」

小鷹が遠慮がちに聞いてくる。一体何が気になるんだか。

「いいじゃんか。好きなもんは好きで。いくら友達ができてもな、趣味を理解してもらえなきゃ長続きしやしねえよ。バカにされようが引かれようが好きなもんは好き。それが分からねえってんならそんなダチは俺の方から拒否るよ。無理に仲良くしてもらうのも不愉快だし」

まるで俺の言葉が以外そうにすつとぼけた顔をしている三人。あの、なんか反応してくれませんかね、結構恥ずかしい台詞言ったつもりなんで、無反応だとかかなりキツイものがあるんですけど。

「いや、悪い……冬馬がそんなこと言うなんて、なんつつか、意外で」

「まあ柄じゃねえとは思ってたけどさ、少しは反応してくれてもいいんじゃない？」

こんなことなら適当に流しときゃよかったよ。今更不満をぶちぶち言ってもしょうがないので、本題に戻るとしよう。

「まあ話は戻すけどさ、なんでギャルゲーなワケ？ これって普通野郎がやるもんだろ。女子向けの乙女ゲーやればいいじゃん」

乙女ゲーは説明せずともわかるかもしれないが、文字通り女の子

が恋愛するゲームだ。

ギャルゲーは大抵が男が主人公になっているが、乙女ゲーは女子が主役となり、ム力つくくらいのイケメンどもと毎日を過ごすことになる。男と恋愛……おえっ、言っておいてなんだけど、想像するだけでも気分が悪くなるな。

星奈は俺の発言に意味がわからないと言うような表情で、

「ハア？ 男なんかと仲良くなってどうすんの？」

バツサリと切り捨てやがったよこのアマ。今の発言、俺と小鷹以外の友達が少ない人間に聞かれたら、間違いなく袋叩きに遭うぞ。

「つか今考えたらコイツって異性には理解できないほど人気あんだよな。」

なんで踏まれたり蔑まれたりするんのが嬉しいんだ、あの馬鹿男子どもは。同じ男として生まれながらも全く理解できん………というか、『同じ男』っていうくくりで一緒にしたくないし、されたくない。

「ま、どっかのヘタレにキツネや小鷹みたいなカスはこれでせいぜい対人能力を鍛えるといいわ」

前から気になっていたんだが、俺は一体いつからヘタレになったんだろうか。外見か？ そんなに俺は弱っちく見えるのか？

「……そんなこと言って、どうせまた自分だけ家で何時間もやり込んでるんだろう？ ——さて、割るか」

さすがサデイスティックの代名詞・三日月夜空。他人の物だというのに不快という理由だけでケースをゲームディスクごと叩き割ろうとしていますよ。

膝にバンバンと叩きつけられ、軋みを上げるケースがなんだか不憫に見えてならない。

「ちよっ！　今回はやってないわよ！　開封もしてないじゃない！」

その様子に焦ったように、星奈が大慌てで静止の声をかけた。見てみると、未だに購入時に巻いてあるビニールが被さったままだった。よく我慢できるな。俺は買ってから即行破り捨てるぞ。

「ふん、だったらさっさと開けて準備しろまったく使えない肉だな。お前の使えなさには呆れるばかりだ」

「ぐぐ……」

顔をひきつらせる星奈。ちなみに俺は夜空の容赦のなさと嫌みっぷりと肉という単語に感心させられてばかりだ。

これだけの遠慮がない性格のクセに、よく友達が欲しいなんて言えたもんだな。つーか肉って何？　もしかしなくても星奈のあだ名なのだろうか。まさか俺のあだ名はさっき言ってたほうれん草で定着化しないだろうな。

「……なあ小鷹、帰っていい？」

星奈がゲームの準備をしている間に、小鷹に声をかけた。

以前の二の舞はごめんなので、なんとか抜け出したいんだよね。それになんかこれまでの直感からか、妙な感じがする。ここにいと面倒なことに巻き込まれそうな気がするというか（この部に入っで面倒がない日なんてあったためしが無いがそれはそれ、これはこれだ）。

「い、いやちよっど待ってくれよ。俺一人であの二人を相手にする

のは……」

「小鷹クン、なんか今の言葉、聞き方を違えると君が酷く欲求不満に聞こえるんだけど」

「は？ ——ぶっ！ ち、ちがっ！ そんなつもりはなくて……！」

慌てふためく小鷹の姿を楽しんでいると、嫌な予感はあるけど少しは付き合ってやるか、みたいな気分になっていた。——ああ、そういえば友達ってなんかこんな感じだった気がすんな。外見はヤンキーとしか形容できないが。

ギャルゲーの世界へようこそ 1

準備だけでかなり時間がかかったが、ようやくゲームスタート。ちなみに説明書は誰も読んでない。アクションならともかくシミュレーションなら感覚でなんとかなる、と星奈が言ったからだ。…恋愛シミュレーションでも説明がないと不可解な展開になるってこと、知らねえのか？ まあいいけど。

テレビにメーカーのロゴ、次いでオープニングに入る、はずなのだが、

「邪魔」

コントローラーを持っている金髪馬鹿がスタートボタンを押してオープニングを飛ばした。ギャルゲーにはあんまり興味ないが、普通初めてやるゲームのオープニング飛ばすか？ 俺は飽きるまで最後まで見るぞ。

タイトル画面に移り、ニューゲームを選択。

うげ、このゲーム、主人公の名前を自分で決める類いのやつか。

ロープレは大抵主人公の名前決まってるからなあ、俺にとってはなんか違和感がありまくりだ。

「名前どーすんの？ まさか小学生じゃあるまいし、自分の名前入れるワケにも……」

「ハア？ 何言ってるのよ。神であるあたしが主人公に決まってるでしょ」

……そうですね。まあお前が恥ずかしくねえならそれでもいいですよ。

口に出すとまた面倒なことになりそうなので、心の中で星奈に対

する不満を溢す。

しかもう一人の馬鹿はその決定が不満らしく、夜空は腕を組みながら、

「おい肉。何故お前が主役なのだ、ここは部長である私だろう」

この部活に部長なんてものがあつたつてとこに驚きだが、そこはスルーしておこう。

「バカじゃないのあんた。あんたが主役になつたら恋人ができない三年間を過ごすに決まってるじゃない」

その台詞をお前が言うのか。

「なんだとこの肉……。肉にこそ恋人などはないだろう。お前は肉家の炎に体中舐め回されてる」

「キツネこそ野生の仲間とどっかで乳くり合つてなさいよ」

噛みつくような勢いで暴言を連発する馬鹿二人。つーか女子高生がするような会話じゃねえな。

「主人公は男なんだから、ここは間をとって俺か冬馬の名前で」

「却下」

無情にも小鷹の発言は二秒で、しかも同時発言で切り捨てられた。そして何故俺の名前まで出したんだ小鷹よ……。俺は頼んでないぞ。

「つーかこれは星奈のゲームなんだから、星奈の自由にさせりゃいいだろ。それが不満なら、後から夜空も自分のデータ作りゃいいんだし」

それが不満、というか夜空にとっては不満しかないんだろうけどさ、買った張本人の遺志は尊重すべきだろう。

素直に言っと、単にまた喧嘩になりそうだからもっともらしいことを言っただけなんだが。

「……しょうがないな。心の広い私が譲ってやろう」

この間のモン狩の状況をもう一度見ても、こんな世迷い言としか思えないことを言えるのだろうか、このアマは。もし言えたら、とんでもなく肝の据わったヤツか、脳外科に行く必要があるようなド馬鹿のどっちかだ（多分どっちもだと思うが）。

「ふん、わかつてるじゃない冬馬」

「そう思うなら感謝くらいしろよ」

「いいわよ、ほら、そこに四つん這いになりなさいよ。踏んであげるから」

「テメエはなんで普通の感謝ができねんだよクソ馬鹿！」

野郎だったら蹴り飛ばしてるところだ。

「え？ クラスの男子は嬉しそうな顔するわよ？」

「俺をあの変態どもと一緒にすんな！」

「何よ、不満なら何も上げないわよ」

「いらねえし期待もしてねえよ」

言葉通り、期待してたワケじゃねえけど、ここでその感謝のされ方は予想を超えていた。一体こいつの頭はどうなってるのか、一度でいいから覗いてみたいもんだ。

「ええと……か、か、柏……………崎……………」

星奈が不慣れな手つきで名前を入力していく。自分の名前で恥ずかしくねえの、という疑問もあるが、こいつには不毛な質問だろう。だってナルシストだし。自分大好き、自称女神だし。ここまで自分を好きになれるってのも相当なもんだが、羨ましく思えないのは人間として当然だと思いたい。

そしてカーソルが『せ』のところに移動したところで、

「やっぱり気に入らない」

そう呟いた夜空がコントローラーに手を伸ばし、無茶苦茶適当なボタンを押した。しかもご丁寧にスタートボタンも押したよ。

「何すんのよ！」

星奈はかなり怒っているみたいだがもう明らかに遅い。スタートボタンを押したので名前の入力画面は終了し、ゲームの本編に入っていた。

主人公のモノローグが流れ始めた。

僕の名前は柏崎せもぼぬめ。自分で言うのもなんだが、ごく普通の男子高生だ

いやどう考えても普通の男子高生じゃねえよ。絶対に何かありそうな名前だ。

親から嫌われてんじゃないかねえのかとも思ったが。

「誰よせもぼぬめって！」

「きつとこれが神に与えられた主人公の名前なのだろう」

「んなわけあるか！」

「いいんじゃないの？　せもぼぬめ、馴染みやすい名前じゃねえか」
「どこが！？　もし現実には絶対に引かれるわよ！」

確かに。ちなみにお前もリアルでは引かれる類いの人間だと思うけど。

怒鳴り散らす星奈だが、夜空は全く気にした風もなく続ける。

「冬馬の言う通りだ、結構いい名前じゃないか。いつその機会に肉もせもぼぬめに改名したらどうだ？　星奈って言いにくいし」

「どこが言いにくいだよ！？　二文字じゃない！　せもぼぬめの方が超言にくいわ！」

「星奈という名前は口に出すだけでムカムカしてくるのだ。頭に浮かべただけでなんとなくイラッとするし」

「あたし自分名前をここまでき下ろされたの初めて！」

「しかも金髪だし？」

「あ、そうそれも」

「冬馬はどっちの味方なワケ！？　つーか金髪関係ないでしょうが！」

いや、少なくともお前の味方ではない。夜空の味方でも断じてないが。

「リセットするのも面倒だし、この名前のままでいくぞせもぼぬめ」

「せもぼぬめはゲームの主人公の名前！　あたしは星奈！」

おい、いいのかよ。今の台詞、主人公の名前を認めたと同義だぞ。

「よし、肉もゲームの主人公名をせもぼぬめと認めたことだし、さっさと進めろ」

「あつ！？ ……くっく…」

涙目になってきたので、そろそろ星奈の味方をしてやろうかと思ったのだが、渋々としながらもリセットせずにゲームを開始した。

……別に指図される謂れはないんだし、リセットすりゃいいのに。

「というか、冬馬と夜空って普段仲悪いのに、なんで星奈を弄るときだけ息統合するんだ？」

「ああ？ 誰と誰が息投合だ、目ん玉くり抜いて蝶結びにすんぞ」「な、なんでそこまで嫌がるんだ！？」

小鷹が小さな声でバカなことを言ってきたので、こっちも言葉で黙らせる。

夜空と息が合う？ 夢はベッドに潜り込んで永眠してから言うてほしい。

主人公せもぼぬめの現在の状況がモノローグされる。

高校に入学したばかりの、何の特徴もないごく普通の少年で、充実した学園生活を送りたいと思っている……というのが柏崎星奈……じゃなくてせもぼぬめの設定らしい。

「なーんか自分で普通の少年って言われるととんでもなく胡散臭く感じねえ？」

「そうね、分身とはいえ、あたしが普通なんて明らかにおかしいわ」「いやそういう意味で言ったんじゃないがねえんだが」

おかしいつつたらお前の頭も大概おかしいよ。

「それにせもぼぬめって名前はすごい特徴のような気がするんだが」

確かに、小鷹の言う通りだ。普通とは思えない名前の上、しかも

発音しにくい。つーかこんな名前をつけた親は嫌がらせとしか思えねえ。

「絶対いじめられる名前だな。DQNネームというレベルじゃない。柏崎さんちのご両親はきつと生まれた子供を微塵も愛してなかったんだな可哀想に」

可哀想だと思っなら何故普通に名前をつけさせてやらなかったのか、とても不思議な疑問だ。

「あ、あんたが付けたんでしょ……！」

「ほら、泣いてねえでさっさと始めるよ。お前とゲームの主人公は別だっで自分で言ってたじゃねえか」

「あ、うん……」

涙に潤んだ目をぐしぐしと擦りながら、改めてゲームを再開するせもぼぬめ……じゃなくて星奈。

普段なら俺もからかっていただろうが、流石に涙目の人間をいじるほど酔狂じゃない。つーか前から思っってたんだが、なんで普段は気丈なくせして実際は打たれ弱いんだよお前……。

ゲームを進めていくと入学式が終わり、自分のクラスに向かうことになった。

そこへ、なんだがチャライ感じの男子生徒が話しかけてきた。

《ようっ、せもぼぬめ》

『ようっ』だけが音声付きで、主人公の名前は発音されなかった。これが慣れねえんだよな。俺の持つてるロープレは大抵名前が設定されているので、ほとんどがボイス付きだ。そのせいで、『ボイスが元からない』ならともかく『字が表示されていて途中にボイス

が抜かされる』と、なんか凄く不自然な感じがすんだよね。

仕方ねえことなんだけどさ。

余計な話が頭に混ざったが、このチャラ男に関しての説明も見ておこう。

この男子生徒はせもぼぬめ……というか、主人公の親友で、鈴木マサルという名前らしい。……なんか名前が凄まじくモブキャラっぽい、つーか適当な感じがする。

「馬鹿な……既に親友がいる、だと……!？」

この『親友』という単語に反応したのは星奈でも夜空でもなく、予想外に小鷹だった。目を見開いてテレビに掴みかかる小鷹。やべえ、普通のヤンキーに絡まれるより五倍は恐い。

「自分がどれだけ恵まれた環境にいるか自覚したことのないやつはこれだから！ お前みたいな奴が『パンがなければケーキを食べればいい』とか言うんだ……！」

「おい落ち着け小鷹！ 端からみたらテレビに掴みかかるイツちゃった人状態だぞお前！」

ぐおおおお！ 見た目通りかなりの力だなこいつ！ つーか並のヤンキー以上だよ！ それでもなんと小鷹を羽交い締めにしたがらテレビから遠ざける。もしかして『親友がいながら充実した学園生活を送りたいとかほざいてんのかこの野郎は！』とか思ってるんだろつか。あながち間違ってもなさそうだから恐い。

夜空が「小鷹顔が恐い。ていうか、キモい」なんて呑気に言ってる。星奈は小鷹の形相（!？）にビビってビクビクしてる。

つーか手伝えよお前ら。

小鷹を何とか落ち着かせ、ゲーム再開。……馬鹿二人はともかく、まさか小鷹が暴走するとは思わなかったぜ。まあいいや。

話によると、マサルも充実した学園生活を送りたいと思ってるらしく、そのためには可愛い女の子と仲良くなるのが一番らしい。

「残念だな小鷹、このチャラ男、お前との友情はクソ以下のゴミだつてさ」

「マサルはそんなことは言っていない！ マサルは主人公にも自分と同じように学園生活を満喫してほしいからこう言ってるんだ！ 紛れもなく最高の親友じゃないか」

力一杯に宣言する小鷹。ちなみに俺はかなり引いてる。

マサルが言うには、女の子と仲良くなれば、買い物に行ったり遊びに行ったり修学旅行や文化祭で楽しく過ごせるらしい。

別に女の子じゃなくても楽しいもんは楽しいだろ。これは何か？文化祭とか修学旅行をゲーム一筋で通してきた俺への当て付けか？

「いいこと言うわねチャラ男のくせに。まさにあたしはそう友達がほしいのよ。やっぱりこのゲームで正解だったようね」

「ギャルゲーみたいにリアルが動くワケねえだろ……」

「なんか言った？」

「柏崎さん制服のボタンかけ違えてるつつつたんだよ」

「え、ウソ？ ——ってちゃんと合ってるじゃない！」

「ああ、嘘だしな」

「こ、この……！」

「で、ゲームはやらねえの？」

「……やるに決まってるでしょ……」

膨れっ面をしながらテレビに視線を移す星奈。涙目になるかも、とか思ったけど、運がよかったんだろうか。

そつえば、星奈って夜空にいじられるとよく泣くくせに、俺がいじると不満そうな顔するだけだな……なんか違いがあんのか？

「……マサルは何故ここまでせもぼぬめに献身的に尽くすのだ？
弱みでも握られているのか？」

実も蓋もないようなことを言う夜空。

だが言いたいことは分かる。

何この学校には可愛い女の子がたくさんいるって。リアルに対する嫌味？

知りたきや女の子の情報教えてやる？　なんでそんな簡単に苦労して手に入れたであろう個人情報教えてくれんの？

モテるためのファッションや気の利いた会話の仕方もアドバイスしてくれる？　こんなこと言うチャラ男いねえよ。

「それが友情じゃないか。友情は見返りを求めないものなんだよ。なんていいやつなんだマサル……ひたすらマサルとの友情を育むことはできないのか？」

小鷹……お前、二次元の親友にそこまで……。区別は重要だと思います。

「どうでもいいわよこんなチャラ男」

星奈が冷たく言い、ゲームを再開する。

クラスに入り席に着くと、一人の女子が話しかけてきた。

名前は藤林あかり。席はせもぼぬめの隣で、黒髪ロングの穏やかそう、かつ真面目そうな感じだ。なんか夜空が成功してたらこんな感じになったんじゃないかと思う。

《入学したばかりで不安だったんだけど、隣がいい人そうでした。これから仲良くしてね、柏崎くん》

印象の違い通り、夜空とは似ても似つかない台詞だ。

そんなことを考えていると、画面に選択肢が表示された。この選択肢であかりの好感度が上下したり、後のイベントのフラグだったりするんだろう。

ちなみに選択肢は三つ。

↓1「こちらこそよろしくね！ あかりちゃん」

2「ああ、よろしく藤林さん」

3「……馴れ馴れしい女だな、消えろ」

つーか3の選択肢……お前どこの組織の人間だって突っ込みたくなる選択肢だな。

さすがに1は馴れ馴れしい気もするし……妥当な線で2か？

「3ね」「3だ」

どうして揃わなくてもいいような時に意見が寸分違わず揃うんだお前らは。

「なんで3！？ 一番ありえねえだろ！？」

「まあ常識的に考えておかしいな」

驚く小鷹と肩をすくめる俺に、星奈と夜空は馬鹿を見るような目で、

「ハア？ 入学初日にいきなり知らない男に声をかけてくるような女が信用できるわけじゃないじゃない」

「ああ。きつとこの女、クラスの男全員に同じこと言ってるぞ」

お前らのその歪んだ知識はいつたどこから覚えて来たんだ。友達いないのに、不思議でしょうがない。

「いやいやいや、真面目そうな娘じゃないか」

「ああ……どっかの馬鹿じゃあるまいし、そこまで悪どそうには見えねえけど」

俺の嫌味に気がつかなかったのか、夜空はせせら笑いながら、

「こういつのに限って本当はビッチなのだ。ほら、クラスに一人はいるだろう、清纯そうな見た目で裏では男を食いまくってる女」

「そんなあるあるトークのようなノリで言われても！ いるのかそんやつ？」

「知らねえけど少なくとも俺は見たことない」

「私も知らないがきつという。最近のJKはビッチばかりってネットに書いてあったし」

「……知らないくせにそこまでボロクソ言えるお前の頭を疑いたくなんな」

それと、その理屈で言うとお前もビッチなんだけど。

ついでに知ってる奴は知ってるかも知れないが『JK』ってのは『女子高生』の略ね。KY知ってる奴なら大概は知ってると思うんだけど。

「それじゃ、3でいいわね」

俺と小鷹の反論はあっさり却下し、3を選ぶ星奈。

あかりは悲しそうな顔をして、

《ご、ごめんね、柏崎くん……確かに初対面なのに馴れ馴れしかった

たかも……今度から気を付けるから、気を悪くしないでね」

見てるこっちまで悲しくなるような様子で去って行った。

もしリアルこんなことが起きてたら、この二人ぶん殴っているところだ。

「今度から気をつけると言えばなんでも許されると思っていいのか？ その場しのぎの謝罪だけで、本当は自分が悪いなんて思っていないことが丸分かりだな」

「ふん、外面だけのビッチにようはないのよ。てめーはその辺の頭悪いチャラ男と乳くり合ってるバアア力！」

既に画面から消え失せたというのに、未だにあかりの暴言を連発する夜空と星奈。最悪にもほどがある。……それにしてもこいつら、本当に友達ほしいと思ってるのか？ かなり疑わしい。

「冬馬、これ」

「あん？」

あかりを罵り続ける二人を他所に、小鷹が何かを手渡してきた。

……このゲーム説明書？

もとから開いていたページを見ると、そこには藤林あかりが載っていた。一番最初のページで一番目に紹介されてるんだから、多分このゲームのメインヒロインなんだろう。

そしてそのキャラクター紹介のページには「争い事が嫌いな優しい性格で、誰とでも仲良くしたいと思っている」と書かれている。

リアルにこんな理想的な人間がいるかどうかは知らないが、正直この二人にプレイされるゲームは不憫でならない。

藤林あかり……リアルでは存在できない人間だが、本当に悪かった……これから人を見る目を養ってほしい……。

ギャルゲーの世界へようこそ 2

藤林あかりとの会話を最後に、せもぼぬめは家に帰宅した。

すると主人公のステータスと、いくつかのアイコンが表示された。
なんだこれ？

「小鷹、何これ」

「ああ、えっと、次の一週間で『勉強』『スポーツ』『バイト』『お洒落^{しゃれ}』などの中から選択して、その選択した事柄に応じてパラメータがあがるんだってさ。パラメータが上がると他の女の子との出会いイベントが発生するらしい」

「……イベントにパラメータが必要なのか？　つか恋愛に関係してるパラメータなんてお洒落と金……ていうか、バイトくらいしかねえじゃん」

「いやそれは俺にもわからないけど」

このゲーム、リアルに近いところもあるくせに妙なところがリアルからかけ離れてる。一週間勉強しただけで学力が上がるわけねえだろ。寝ずにやってたわけじゃあるまいし。

俺の疑問を他所に、夜空は感心するように頷いていた。

「……実力がない物は女子と知り合うことさえできないとは世知辛いな。流石シミュレーションを名乗るだけはある。まるで現実のようだ」

……学校にいる女子になら、声をかけて友達になれば仲良くなれると思うのは俺の妄想なんだろうか。

星奈も夜空の言葉に反論はないようで、

「なんの優れたところもないボンクラに意味もなく声をかけてきたさっきの藤林って女がいかにも男好きのビッチだったか、ここからも推し量れるというものね」

厚意で話しかけてきてくれたというのに、なんつー言い種だ。そして自分の分身とかほざいてた主人公をボンクラ呼ばわりかよ。機会があつたらボンクラって呼んでやろう。

「藤林あかりはただ優しくて親切なだけだろ。説明書にも書いてあるし……」

小鷹のもつともな言葉を星奈は笑いながら、

「そんな上っ面だけのプロフィールが信じられるわけじゃない。そんなもんキャラ作りに決まってるわ。スリーサイズですら信じられるかどうか」

「上っ面じゃないプロフィールなんて、友人関係でもなけりゃストーキングでもしねえとわからねえじゃねえか……」

「というか説明書に嘘を書いてなんの得が!？」

「あーやだよだ。こういう馬鹿な野郎どもがアイドルの公称スリーサイズとか鵜呑みにしてハアハア言ってるわけね」

あ、イラッ　とききました。

「そしてこんな発言をしてる女が同性から嫌われて『柏崎さん男子から好かれてるんだから準備運動も男子としたら』とか言われんだな」

「う、うるっさいわね！　あんな女、あたしから願ひ下げよ！」

え、いや、俺は単に今さっきの発言の嫌味で言っただけなんだけ

ど……今の焦りよう、まさか実際に言われたことがあるんじゃないだろーか。

どうしよう、否定する要素の方が少なすぎてなんか罪悪感が膨らんできた。

「な、何よその目は！ 全然全く悔しくなんてなかったんだから！ 先生が相手でも悔しくなんてなかったんだからね！」

何そのツンデレっぷり。ツンデレとはなんか違うかもしれないが似たようなもんだろっ、多分。

なににせよ、俺に言えることはひとつだけだ。

「——寂しい奴だな」

「憐れむような目で傷を抉る台詞を吐くんじゃないわよ！」

心外だ。結構真面目に同情してやったのに。

せもぽぬめの初期能力は当然ながら全体的に低い。このゲームの主導を握ってる駄目人間二人の「頭が悪い奴は嫌い」という主張により、最初は学力を重点的に上げることにした。

せもぽぬめなんて間抜けな名前のくせに学力を上げるとは……なんて健気なんだ。親から「貴方には期待なんてしていません」と思われていても不自然じゃないのに。

星奈がノートと鉛筆のアイコンを選択すると、デフォルメされた主人公っぽい奴が勉強しているアニメが表示され、その後で学力のパラメータが上昇した。全く、貰ったばかりの教科書を汚すとは、なんて物を大切にしない奴だ。……別に俺が勉強嫌いってわけじゃないよ？

「……勉強すればするだけで伸びるとは、こいつは最初どれだけパ
ーだったんだ？」

胡散臭げに夜空が漏らす。幻想の世界とリアルを重ねんじやねえ
よ。まあ俺も似たような事言ってたような気もするが、現実に近い
ギャルゲーと大抵が現実からかけ離れたRPGはなんか違うじゃん
？ まあ最近のRPGもキャラはやけに可愛くなって来てるけど。

「つーか勉強だけしてたせいで、全然女子とイベント起きてねえん
だけ」

「黙れほうれん草。馬鹿のままでいられるくらいなら恋人など暴漢
で十分だ」

「お前自分で何言ってつかわかってんの！？」

ほうれん草には相変わらず癪に障ったが、こいつの発言の方が問
題だ。暴「漢」って野郎じゃねえか！ 喩えとはいえ、そんなクソ
ツタレな『IF』を持ち出すなよ！

「……それにしても、最初がどれだけ悪かったにせよ、一ヶ月で学
力五倍つてすごくない？」

感心したのか、夜空同様におかしく思ったのか知らないが、小鷹
が漏らす。

小鷹の言う通り、せもぼぬめの学力のステータスは、始めたばか
り20程度だったのに、今となつては100を超えていた。リアル
の人間にはその数字がどれだけ凄いのかはわからないけども。

「いやもしかしたら授業の内容自体がパーなのかもしれねえぞ。だ
から呑み込みが早いだけかも」

「授業の内容がパー？」

「ホラ、足し算引き算からやってるとか」

「なんだと!？」

何故か夜空が声を荒げた。

「おい肉！ 貴様何故こんな低レベルな学校に入学した！ 今すぐに転校しろ！」

「ハア!？ なんの無理、というか不可能に決まってるじゃない！」

理不尽すぎる八つ当たりの対象にされた星奈に僅かばかり同情しない訳でもない。

と、くだらない言い争いをしてる間にいつの間にか画面が切り替わっていた。

見渡す限り本棚本棚……どうやら図書館みたいだ。図書館……俺もよく行くんだよね。学校サボった時にゲーム持って。

せもぼぬめは勉強に疲れたようで、気分転換に本を読もうと席を立つ。

面白そうな本を見つけ、せもぼぬめがその本を取ろうとすると、同時に同じ本を撮ろうとした女子がいた（他に数百冊あるのに何故ピンポイントで直撃するかは疑問ではあるがそれはまあ仕様とゆーことで）。

お下げ髪で眼鏡の、大人しそうな女子だ。さっき説明書を見たときに目に入ったが、確かこの娘も攻略キャラだったと思う。

《あ、すみません》

慌てて手を引っ込める女子。正直、スゲーわざとくさい。つかテンプレの匂いがプンプンする。

そこで選択肢が出現した。

↓1《こつちこそごめん》と彼女に本を譲る

2《この本は僕が先に取ったんだ!》と遠慮なく本を持って行く

つーか2の選択肢、お前何歳だよ。少し大人になった方がいいと思う。一瞬、プレイヤーの性格まで反映されるのではと勘ぐってしまっただが、まあありえねえ……よな?

「本なんて読んでる暇があつたら勉強しろせもぼぬめ」

「次のテストまでに学力200を目指してるんだからサボってんじやないわよクス。一位以外を取つたら許さないわよ」

藤林あかりのこともあつて1を選ぶかと思つたが、意外にも2を選んだ。相手を思いやつての発言かどうかは疑問が残るが。

せもぼぬめが本を譲ると、その女子は申し訳なさそうにしながらも嬉しそうに微笑んだ。

《あの、よろしければお名前を教えてくださいませんか?》

耐えるんだ俺。馴れ馴れしいとか思つてないぞ……!

《いいよ。僕はD組の柏崎せもぼぬめ》

《柏崎せもぼぬめさん……いいお名前ですね》

「……なんという残念な感性……。こわ……」

それには同意するが夜空さん、キミに残念呼ばわりされた奴は多分死にたくなるほどに傷つくと思う。同時にお前にだけは言われたくないと思う。

「あんたがせもぼぬめなんて変な名前付けるからおかしく見えるだ

けよ！ 星奈だったら普通の会話だったのに……」

「わーかったからさっさと進めろよせもぼぬめ。プレイヤーがお前
って時点でおかしな方向に転がるのは目に見えてんだろ、リアルで
もゲームでも」

「せもぼぬめはゲームの主人公！ あたしは星奈よ！ ていうかあ
んた、さりげなくかなり失礼なこと言わなかった！？」

「え？ どこが？」

「しかも自覚なし！」

変なこと言う奴だな。なんというか、お前の在り方が面白おかし
いんだから、お前を取り巻く環境が面白おかしくなきゃそれこそお
かしいだろ。

テレビに視線を戻すといつの間にか自室に戻り、ながた ゆきこ「長田有希子を
デートに誘えるようになりました」と表示されていた。

長田有希子ってのはさっきの眼鏡っ娘のことだろう。あれだけで
デートに行ける関係になれるのか……俺にはあまりにも無謀とい
うか、なんか長田有希子の将来が心配になってきた。まあ将来なんて
ないんだけど。

唐突に星奈が、

「んー、とりあえずこの子と友達になってみようと思うんだけど文
句ないわね？」

「お前の決定に従わなきゃならんことに文句ある」

「なるほどそれに関しては私も同意見だ」

「だったらどうしろってーのよ！ というかわざわざあんた達に確
認取ったのが間違いだったわ！」

なんだわかってるじゃないか。

それと忘れてるんだろうけど、このゲームは友達じゃなくて恋人
を作るゲームだ。

ギアルゲエの世界へようこそ 3 (前書き)

大変お待たせいたしました！

三カ月かかりながらもなんとか仕上げました。ね、眠い……。

ギャルゲーの世界へようこそ 3

長田有希子と仲良くなるために架空の現実をいきるせめぼぬめ。
なんか詩人チックな台詞だけど、狙った訳じゃないよ？

「小鷹つち、この娘^こつてどんな娘なワケ？」

「……さっきマサルが読書が趣味で、好きな場所は図書館とか落ちていた場所って言ってたんだが」

「あれそうだったっけ？」

全く記憶にない。つーか俺、何かに集中すると周りの声聞こえなくなるからなあ。多分さつき帰ったらなんのゲームやろうかって悩んでた時に今の会話が流れたんだと思うけど。

「ふん。私のポスターの意図に気がつかなかった時点で能なしだとは思っていたが、お前はつくづくパーだな。むしろくるくるパーだ」

はい、俺が少し弱みを見せるとこれですよ夜空さん。

「なんでデメエに迷惑かけた訳じゃねえのにそこまで言われなきゃならねえんだよつり目コンプレックス！」

「な、なんだと貴様……！ ほうれん草の分際で……！」

「俺がほうれん草ならお前は毒キノコじゃねえかよ、カビ狐！」

どこまでムカつく女なんだコイツは！ 星奈の空気読めない発言が可愛く思えるくらいに腹が立つわ！

我ながらそろそろ飽きてもいいだろうに夜空と少し口論した後、画面に目を戻した。なんかいつの間にか仲良さ気に長田有希子と水族館でデートしてんですけど。

「何？ 星奈お前、付き合わないと長田有希子は官能小説ばっか読んでるって噂を流すとか言って脅したの？」

「んなワケないでしょ！ 仲良くなったら勝手にこうなったの！」

「お前他人と仲良くなる方法なんて知ってたの！？」

「あんた堂々と失礼なこと連呼してるわね！ というか、あたしにはあんたの発想の方に驚いたわよ！」

いや、星奈とか夜空ならやりそうじゃね？ 夜空だったらこの範疇に留まらないとも思えるが。

「それにしても……」

星奈が再び画面を見ながら、

「はー、いいわよねこういうの。女同士で遊びに行ったりショッピングしたりするの」

恍惚な表情で告げる星奈。……この女、なんつー危ない^{アマ}表情をするんだ。道端で見かけたら通報してしまいそうだ。

一応せめばぬめは男だという設定だとか、夜空と行けばいいじゃんとか、突っ込みどころはあったんだが、この表情を見たら言い出しにくくなった。……ゲームどんな表情する奴、マジでいるんだ……しかも身近に、つかクラスメートだよ……。

長田有希子との距離は順調に縮まっている。いるのだが……、

「はあああ~~~~？ 可愛いわこのコ、ほんと可愛い……女の子が自分を慕ってくれるのって最高！」

……このハイになってるアホ金髪お馬鹿を誰か止めてくれません

か。

星奈の感情移入は凄まじく、今となつては長田有希子と喋るだけで頬を赤らめ、よだれまで垂らしかねない勢いだ。長田有希子がそれだけ星奈の琴線にピンと……というかはち切れそうな勢いでクリーンヒットしたということだろう。確かに健気で良い子だとは思うけど……。

「……………ふん、まあ、割といいやつじゃないか……………」

夜空と比べれば大抵の人間が『いいやつ』に見えると思うんだが。

「冬馬、無理をするな。力を抜いた方が楽になるぞ？」

「ははっ、冗談言つなよ。力抜いたらこのハエ叩きが落ちてくるだろ？」

にこやかに、しかし黒い空気を纏った夜空のハエ叩きをなんとか受けとめ「お、俺の鞆……………」る。

「つかどういふ勘してんだよコイツ、という疑問がハエ叩きどこから出したんですかー、という疑問にかき消されていく……………」

まあ、とりあえず攻略は順調らしい。彼の落とし神はこんな感じのゲームを数百やり続けたりしいけど、今はどうでもいい話か。

だがとある放課後、長田有希子と一緒に帰ろうと言うと、何故か無視して歩いて行つてしまった。なんか怒つたみたいな表情だったな。

「な……………!？」

「ちよっ、な、なんで!? どうしたの有希子!？」

夜空と星奈もかなり驚いたらしい。あれだけ仲良くなったのに、いきなりあれじゃ無理もねえか。

画面が主人公の自室へと変わると、マサルから電話が掛かってきた。

マサル曰く、『女生徒の間でせめばぬめが藤林あかりを傷付けたという噂が流れている』とのこと。

「長田有希子が急に冷たくなったのはこれが原因か」

説明書を唯一読んでいた小鷹が口を開いた。

「はあ？ どういうことよ小鷹」

「一人の女の子に嫌われると、悪い噂が流れて連鎖的にそれ以外の女の子も主人公に悪い印章を持つようになってしまうつた説明書に書いてある」

「はー、中途半端にリアルだと思ってたけど、これはありそうな気もするな。実際、星奈のことは有名だし。」

「そういえば藤林あかり、最初から今まで邪険に扱ったけどちよろちよろ出てきてたな。もしかしてそれ？」

「ああ。長田有希子には嫌われないようにしても、藤林あかりのことは一方的に嫌ってた……っていうか罵倒してたから悪い噂が広まったんだと思う」

「ふーん」

まあ、当然ついたら当然だよな。良い噂ばかりの奴はもっと信用できないが、悪い噂の奴だって好かれはしないだろうし。

でもこれ、ゲームだし挽回することもできるだろう——

「……つまりあたしが有希子に嫌われたのは、藤林があたしの悪口を学校中に触れ回ってるからなのね……あの腐れビッチ……！」

どうしてそんな結論に至るのか不思議でしょうがないのは俺だけではないと信じたい。

「いや、そういうことじゃないと思うんだが……」

「許せない……絶対に許せない……卑怯者……今度あったら殺してやる……」

小鷹、スルー。

「……ちなみに説明書には『評判が悪くなってしまったら早く謝って仲直りしようって書いてあるぞ』」

「ハア！？　なんであたしがあのクソ女に謝らないといけないの！？　仲直りもなにも、あの雌豚と仲良くなった覚えなんてないわ！」

確かに覚えなんてないだろうなあ。一方的に嫌ってただけだし。うーん……どうすっかな……。

「……いいんじゃない？　好きにやらせれば」
「と、冬馬！？」

驚いたように俺を見る小鷹。まさか俺に期待してたんじゃないだろうな。

「プレイヤーは星奈だろ？　だったら俺とか小鷹の言葉は参考程度でいいんじゃないの？　最終的に決めるのは星奈なんだし」

「何よ、冬馬の方がわかってるじゃない」

嬉しげに頷く星奈。つーかお前の言い分は全くわかってねえからな。

「で、でもこれ以上評判が悪くならないようにしないと……」

「自分が悪いわけでもないのに、勝手に話しかけてきて勝手に傷ついたなどとぬかすバカ女に頭を下げるなんてまっぴらだ」

流石夜空さん、どこまでも性根が腐つてやがる。

「これで三対一ね。あたしは絶対に謝らない。それに有希子ならきつと誤解だってわかってくれるはずだわ。あたしは有希子を信じる」

誤解なんて一つもないと思うけど。

「そんじゃ後は頑張つて。俺は帰るから」

星奈がゲームを再会すると同時に俺はソファから立ち上がった。

「？ 何よ、あたしが有希子と仲良くなるの見たくないの？」

星奈が首を傾げる。……どういう理屈だよそれ。

「今日木曜だから新しいゲームが出んだよ。欲しいのはないけど、一応見ておきたいの」

「木曜ってゲームの発売日なの？」

「まあ、大体な。例外はあるけど。つい訳で帰る。じゃあな」

鞆を持って外に出る。どうせこのまま見てもいいエンディングは見れそうにないし。

「あ、待てよ冬馬！」

廊下を歩き始めると、小鷹が呼び止めてきた。なんだよ早く帰りたいのに。

「なんだよ、なんかあんの？」

「いや、用ってほどじゃないんだけど……」

言いにくそうな顔をしながら、小鷹は告げる。

「なんでフォローしてくれなかったんだ？ 冬馬が止めてくれたら……」

「何、もしかしてゲームのこと根に持ってたんの？」

「根に持ってたほどじゃないけど、でも気になるだろ。冬馬って口は結構容赦ないけど、悪ノリしてる時とキレてる時以外はまともなこと言ってるし」

「だったらさっきの悪ノリだったんだろ。大した違いなんてねえじゃねえか」

「でも意味もなく人を傷つけたりしないだろ？」

……おーびつくりした。こんな台詞、リアルで聴くとは思わなかったよ。

「小鷹お前、恥ずかしくねえの？」

「う、そりゃ恥ずかしいけど、言い方がこれしか思い付かなかったんだよ」

「まあそれは別にいいや」

誤魔化してもいいけど、どうせ明日も会っんだし、堂々巡りになるよりは早くすませた方がいい。

「んで、傷つけたり云々の話になったんだ。さっきフォローしなか

ったの、そんなに傷ついた？」

「俺じゃなくて星奈だよ。あのまま行ったらバッドエンド直行だろ」

おおう、鋭い。

「星奈がゲームをゲームって割り切れてるんなら別にいい……よくはないけど……まあ、割り切れてるんなら俺も気にしなかったけど、星奈あんな状態だろ？」

「あゝ、のめり込んでたなあ。正直引きそうになった」

「い、いや、俺が言いたいのはそうじゃなくて……」

「あれだけ感情移入してたんだから、バッドエンドは回避しないと結構キツイ。でもなんでバッドに向かうように手助けしたのかが知りたいんだろ？」

「あ、ああ、そうだけど……よくわかったな」

「わらねえよ、他人の考えてることなんて。俺は早く帰りたいの。だから誤魔化す時間を作りたくないだけ」

俺も早くゲームやりたいしね。

さっさと質問に答えて帰ろう。

「あいつらに少しは現実を理解してもらおうと思ったただだよ」

「現実を？」

リピートしなくても別によろしい。つか恥ずかしいんだよ、こんな台詞吐くの。

「小鷹君、隣人部の目的は？」

「え？ と、友達を作ること」

「友達つてのはなんの学習もなく作れるもの？」

「それは……どうなんだろ……というかそもそも……」

「友達つてのは本来、いつの間にかできるもんだろ。気が合った奴がいたら話し込んで、そこから進んでく。意識して友達作ろうなんてやってんのは、隣人部除けばネット関係だけだろうよ」

学校に初めて来た時、不安はあるだろうが友達作ろうなんて考える奴はそうはいないだろう。友達つてのは意識して作れるもんじゃないんだから。というか、意識してたら逆にぎこちなくなってしまうんじゃないだろうか。だって気兼ねなく付き合えるから友達って言っただろ？ 俺の持論ではあるけど。

「でも、それとさっきのと何か関係あるのか？」

「だから言っただろ。なんの学習もなく友達ができるわけねえだよ。あいつらには決定的に思い遣りがないんだよ」

「あー……それは……」

苦笑いを浮かべる小鷹。ぶっちゃけ俺も苦笑気味だ。

「外つ面がよくても大体寄って来んのは異性だろ？ 同性——特にモテる女子は同性に嫌われるだろ。それで性格があんなだったらどうするよ。小鷹、あいつらが男だと思って想像してみ」

小鷹が腕を組んで思考する。そして目を開くと、

「……最悪だな」

「最悪程度で済むならまだましだ。多分俺だったら殴り飛ばすと思うから」

女ということと外見の良さがブレーキになってはいるが、逆に言えばそれしかない。

星奈と初めて話したあの日、あんな台詞をどこかすかしたイケメ

ン野郎に言われてみる。喧嘩売ってんのか程度じゃすまねえよ。

「しょせんゲームだし、リアルじゃ役に立つかはわからねえよ。でも少なくともあいつらはその程度でもいいから勉強した方がいい。付き合い馴れた友達ならあの性格も良さって思えるだろうけど、そんな友達がいないんならマイナス要素にしかない。つーか初対面の人には間違いなく嫌われる。猫被れってわけじゃねえよ？ 単にあいつらには思い遣りつてのを覚えてもらわないとって思っただけだし。……あそこまで感情移入してたとは思わなかったから、咄嗟に思い付いたんだけどな」

いい経験になるかどうかはわからないが、そこは本人たち次第だろう。もつとも、その本人たちには自覚がないからあの程度じゃどうにもならないような気もするけど……。

まあ、こんな感じかな。直接言ってもいいけどそれじゃあいつらのためにならない。というか、あいつらのことだから思い遣り「演技力、なんて最悪な勘違いをするかもしれない。……なんか最低な発想をしている気がする。」

「冬馬……お前……」

「なんだよ、そろそろ帰りたいんだけど」

なんで目を見開いてるのかな小鷹君？ 失礼ながら、凄く怖いんだけど。

「すげえいい奴だな……」

「——……」

そう、なんだろうか。悪ノリしてる時なら簡単に流せるんだが、ここまで真面目に言われると……その、なんだ……。

なんか無茶苦茶恥ずかしいことを言ったんじゃねえの俺——！？

って感情が込み上げてくる。

「そりゃ……どうも……」

返し方がわからず、適当に礼だけを口にする。

結局、この後俺は直接家に帰ってしまった。ゲームをやっても上の空だった。

後日談ではあるが、星奈からギャルゲーを借りた。やっぱり俺にはあのギャルゲー特有の甘ったるい空気は耐えられない……。

——どれくらい昔かは覚えてない。でも——誰かがそう言ってくれたんだ。

小鷹の言葉と全く同じ言葉を——

ギャルゲーの世界へようこそ 3 (後書き)

次回はもう一人のオリキャラを出します。多分来週か、遅くとも再来週には更新できると思います。ちなみにちよつとネタバレすると女の子です

とある休日（前書き）

お待たせ致しました。
更新です。

とある休日

今日土曜日。学生の皆さんにとっては待ちに待った休日です。

当然俺も例外ではない。隣人部に入ってからというもの、ゲームをやる時間が極端に短くなってしまったため、どれだけ休みを待ったことか。そんな休みの日を――

「げっぷ。いやあ、お兄ちゃんが来てくれて退屈しないよ。お茶くらいしか出せないけどゆっくりしてってねっ」

なぜにこの下品極まりない銀髪シスターと隣人部の部室である談話室4で猥談せにやなんのだ……！

「およ？ どうしたのかな、少し不満みたいけど？ たまってるならわたしをオカズにしてみるかい？ それとも主食？」

「オイコラアアア！ テメエはまがりなりにもシスターだろうが！ 神様云々はどうしたんだよ！」

「あはっ、冗談冗談。最近突っ込みに磨きがかかってきてるねお兄ちゃん」

「その呼び方と歳上からかう根性を今すぐ直せ！」

畜生お……！ なんで俺はPSPを学校なんか忘れちゃったんだ……！

時間は三十分前に遡る――というか回想必要ないよね？ 今の状況からして察しはつくだろう？

そうだよ、昨日PSPを学校に忘れちゃって、昨日の時点で学校が閉まってたから今日取りに来たんだよ！

そしたらこのザマだよ……。世界は俺からゲームを取り上げようというのか！？（厨二発言）

「というかケイトさん、仕事はどうしたんだよ。教師って土曜も仕事あんじゃねえの？」

ケイトはお茶を注ぎながら、

「まあ、ある人はあるね。わたしはたまたま偶然、仕事がなくて暇してただけだよ」

「……ホントに仕事ねえんだろうな」

わざわざ偶然とか言ってるあたり、なんか凄く怪しい。まあ、別に俺が困る訳じゃねえから構わないつつたら構わないんだけど。

「お兄ちゃんは心配性だねえ。だいじょーぶ、本当に本当だから」
「あ、そ」

ケイトが運んできたお茶を頂く。……お茶つつーかこれ、隣人部でいつも飲んでる紅茶じゃねえか。

甘ったるいのじゃなくて緑茶が飲みたいんだが、まあ贅沢は言うまい。

「知ってるかい？」

唐突にケイトが口をひらいた。

「お兄ちゃんの所属してる隣人部ってマリアが顧問なんだよ」

「え、そうなの？」

ぶっちゃけ公式に認められてるとすら思ってたため、結構驚きだ。つーかこんなまともな部室があんだから、顧問がいない方

が不自然っちゃ不自然だな。

ちなみにマリアってのはケイトの妹で、外見はケイトをミニチュアサイズにしたような感じだ。性格もミニチュアケイトってな感じで、品の悪さもそっくり。正直な話、あの年でうんこなんて言葉を連呼するのはイロイロとまずいだろう。

ケイトは最早アウトだが。

「顧問なんて聞いたこともなかったから結構意外だな。つーかあのコ、顧問なんかできるの？」

それが一番の疑問だ。確か俺の記憶が正しければ、高山妹の歳はまだ中学にも届いてないはずだ。

顧問なんて仕事内容わかるとは思えないんだが……。

「あー、なんかあの、三日月夜空さん？ に上手く丸め込まれちゃったみたいで」

「え、高山妹ってあいつと関係あんの？」

「ん、まあ色々ね」

「ふーん」

まあ、気にはなるけどこっちから聞きたいほどでもない。顧問ならその内顔を合わせるだろうし、そんな時にでもわかるだろう。

で、本題に入るが、

「帰っていいですか高山先生」

「だーーーーーめ」

うわ、鳥肌立ったよ！

「お前、その甘ったるい声色やめろ！ すっげえ寒気がする！」

「お兄ちゃんこそ先生なんて他人行儀な言い方げつぶ、やめてほし
いな」

なんてことを言いながら後ろから抱きついてきた。いつの間に後
ろに移動したんだ……。

「やめろ引つ付くな！　つーかお前、なんで紅茶飲んでんのに炭酸
臭いんだよ！」

「ん？　そりや炭酸飲んでるからじゃん」
「ティーカップで何飲んでんだお前は！」

炭酸飲んでんならカップに移す必要ねえだろ。だあー！　つーか
臭い！　炭酸臭い！　ドクトルペーパーの匂いがする！

コンコン

へ？　コンコン？

今のは間違いなくノックの音だ。誰か来たのか？

「お兄ちゃんにお客さんだよ」

抱きついていたケイトが離れ、再び反対側のソファーに腰掛ける。

「俺？　お前じゃなくて？」

「だってわたし、ここに來ること誰にも言っていないもん。だったら
用があるのは隣人部にでしょ」

た、確かにその通りだ。まさかケイトに理屈を説かれるとは……。

「今さりげに失礼なこと考えなかった？」

「冥王星にたどり着くにはどれくらい走ればいいのか考えてたんだよ」

「うん、無理のある嘘をありがとう」

ですよね。俺も無理がありすぎると思ったよ。

それにしても誰だ？ 今日は部活あるって話は聞いてないし、そもそも部員ならノックなんてする必要なんてないだろう。

まあ、考えててもわかる訳じゃねえし、とりあえず出るとしよう。ドアノブに手をかけ、

ガチャ、バガン！

た瞬間、ドアが俺に頭突きをくれて来やがった！

「あぐおお……！」

騒ぐ気になれないくらい痛い。なんて勢いでぶつかってくれたんだドアよ……！ じゃなくて、誰だよいきなり思いきりドアとのフアーストキスくれた奴は！

「……………あ」

視線を上げた先に、見知らない女子がいた。

特徴的には肩に掛かるくらいの茶色い髪。そして敵意を感じさせない柔らかな瞳と言ったところ。

顔立ちは若干幼さが残っており、綺麗よりも可愛らしいと言う方が適切だろう。この学園の制服を着てはいるが、その顔立ちから中等部と勘違いしてしまいそうだ。

そして問題はなんでこのコが隣人部に来たかなのだが……まさか入部？ いや、まさかね。

しかしそれより、未だに顔面にドアをぶつけた謝罪が聞こえてこないのだが……まあ、流石に普通の女子相手にちよつと痛い目に遭わせられたくらいじゃキレはしないが。

え？ 星奈と夜空？ アレは普通の女子の範疇に収まらねえよ。

「いたた……」

とりあえず痛みを我慢して、たまらず座り込んでいた腰を上げる。夜空にはほうれん草呼ばわりされているが、それでも体の頑丈さには自信がある。

何回かどつかの不良に喧嘩を売られたことがあったが、体の頑丈さでなんとか乗りきったほどだ。まあ、痛いのは違いないし、喧嘩が得意な訳じゃないけどさ。

と、俺の密かな自慢話はどうでもいいとして……さっきからだんまりなこのコは結局なんなのだろうか。

……気まずいから何か話してみるか。

「えーつと……談話室^{こくわしつ}4になんか用？」

できるだけ親切に用件を訊ねる。

その問題の女子はおずおずとしながら、

「あの……顔……」

「は、顔？」

なんか付いてたりしたのだろうか。自分の頬に触つてみると、

「う、ごめんなさい……！」

そのまま体を反転させ、談話室4から走って出て行ってしまった。

……え？ 何？ 俺なんかしちゃった？

「お兄ちゃん、いきなり見ず知らずの女の子のパンツを覗くのはどうかと思うな」

「いきなり勘違いされるような台詞吐くな！ 覗いてねえよ！」

「だって顔面殴られてたじゃん」

「ありや一方的なもんだろ！？ 第一、さっきの女子とは初対面だよ！」

「初対面じゃないやつは誰だってそう言うよ？」

「初対面のやつだってそう言うだろうが！」

なぜ俺が一方的に責められなければならないのだろうか。そしてケイトの俺に対する認識があんまりすぎると思えるのは自意識過剰なのか？

「とまあ、冗談はこれくらいにして」

ケイトが会話を一旦打ち切る。……本当に冗談だったんだろうな。

「なんで逃げちゃったんだろうね？ よほど人見知りだったのか、お兄ちゃんの顔が怖い……ってのはあんまりなさそうだね」

「うるせえよ、余計なお世話だ」

わかってるよ、俺の顔に凄みがほとんどないってのは。だから気にしてんじゃねえか。

どっかの金髪ナルシスみたいに自信を持てれば……ああはなりたくないから、やっぱり若干コンプレックスなぐらいで丁度いいや。

「でも人見知りにしても凄いい勢だったね。お兄ちゃんが人から逃げられるなんて初めてじゃない？」

「だから勘違いされる台詞を吐くをやめろ」

俺は痴漢か何か？ それとも殺人鬼か何かなのか？

しかし、実際人から避けられるのは初めてだ。

俺は確かに友達はいないが、小鷹みたいに外見を怖がられている訳じゃないし、星奈みたいに同性から嫉妬されて嫌われてるわけでもない（と信じたい）。

単に友達を作るのを避けて今まで過ごしてきただけだ。まあお陰で用事があるやつしか話しかけてこないし、最低限の会話しか続かない微妙なクラス関係になっちまったけどな……。

「ん……まあ、用事があんならまた来んだろ」

結局俺から逃げた理由はわからなかったが、仕方がない。

しかしその日、問題の女子は結局来なかった。

そして俺はケイトに付き合わされて一時間もゲームをできなかった……。

招き猫が招くの福なのか？（前書き）

はがないのアニメが今月スタートらしいです。でも私は深夜がバイトなので見れない……。

招き猫が招くの福なのか？

休み明けの月曜日の放課後、俺は一応土曜の出来事を話した。

「お前の妄想が生んだ産物ではないのか？　こんな活動内容の決まっ
っていない部活に顔を見せるなど」

鼻で笑う腐れ外道狐こと三日月夜空。しかもこいつ、部長とかほ
ざいてたくせに隣人部の活動を完全否定しやがったぞ。なんでこん
なやつに部長なんてポジションを与えたんだ……。

「妄想なわけねえだろ。俺はお前らと違って現実を見て生きてんだ
から」

空想の中で恋人作って興奮してるようなやつに病気扱いされるの
は心外だ。

そういえば先週のゲーム、どうなったんだろ。星奈が貸してくれ
るとは言ってたけど、別にやりたくなかったから適当にまた後でっ
てあしらってた気がすんだよね。

「お前ら……だと？　冬馬、前言を撤回しろ。こんな脳の栄養を胸
に吸われているような肉と一緒にされるのは心外だ」

「そうね。こんな森の中で子作りに勤しんでるカス狐と完璧なあた
しを同じに見ないでほしいわ」

互いに互いを罵倒しあう夜空と星奈。仲がいいのか悪いのか、正
直わかりづらい。

「貴様……肉の分際で人間に逆らうな。肉は肉らしく腹の中に飲み

込まれてしまえ」

「あんたこそ、狐なら喋るなんて無駄な知識つけなくてコンコン泣いてなさいよ。鳴き声が可愛ければあたしが飼ってあげるわよ。夜空って首輪つけてね」

いつまで罵倒しあってたんだこの馬鹿二人は。先週のゲーム、やっぱり失敗だったんだろうか。まあ大して期待はしてなかったが。

「でもなんでいきなり逃げられたんだ？　もしかして冬馬も顔を怖がられて」

「それはない」

「どうしてそういう時は息が合うんだよ！」

小鷹のまるで仲間が見つかったみたいで嬉しそうな表情を一秒で粉々にするとは……どこまでも容赦ないなこいつら。一緒にされたらされたで悲しいものがあるが（ごめん、小鷹）。

「でもおかしい話よね」

仕切り直すように星奈が言った。

「何が？　ここに入部して以来、おかしい話には事欠いたことはねえんだけど」

「生粋のゲーマーに言われたくないわよ！」

何か妙なことを言っているやつがいるな。ゲームは世界の発展と退化が生み出した遺産だぞ？　俺はその遺産を守ってるだけだ。

「それで何がおかしいんだよ、せなきち星奈吉」

「ああ、うん。だって冬馬が学校にいた理由ってゲームを忘れたからでしょ。いない可能性もあったのに、なんでわざわざ休日に部室に来たのかしら」

おお……確かに星奈の言う通りだ。これだけまともな思考ができる脳がまだ残ってたのか。

「肉にしてはいい観点じゃないか。褒美に今日は帰らせてやろう」

「あはっ、ありがと——って全然ありがたくないわよ！ 何さりげなくあたしを部外者扱いにしようとしてんのよ！」

「肉、それは間違いだ」

「え？ そうなの？」

「貴様は部外者扱い以前に部外者としてすら見ていない。ただの肉、それ以上でもそれ以下でもない」

「あんたどこまであたしを人として見てないのよ！」

いや、それはお前も同じじゃね？ 夜空のこと散々狐呼ばわりしてんじゃん。俺もだけど。

「まあ土曜に来た意味はわかんねえけど、用があんなら今日にはくんだろ。そんな時に聞きやいいんじゃないかねえの？」

「別に来なくても構わない。というか、肉一人でも引きちぎりたい程に腹立たしいのにこれ以上雌メスの部員部員なぞいるか」

「どうして今の会話の流れからあたしが出てくるワケ！？ 強引に引つ張りすぎでしょ！？」

「お、おい、星奈落ち着けて……」

「あたしを宥める前にあの狐を黙らせなさいよヘタレプリン」

「どんな食べ物！？」

「あつたら食ってみてえな」

そして小鷹……それはお前の精一杯のボケか何かなのか？ だとしたら少し黙ってほしい。

まあともかく、今日中に来なくても特に用がなかったただけでことだし。つーか用がないのに談話室4に顔を見せたってのもおかしい話だけど、来ないのなら仕方ないだろう。

なんてことを考えていた矢先、

コンコン

とノックの音が聞こえてきた。え、マジで来ちゃったの？

「来客のようだな。さあ肉、ようやくお前の出番だ。出迎えてやれ」
「なんであたしがそんなことしなきゃならないのよ。愚民たちこそ、こういう時にポイント稼いでおいたほうがいいんじゃない？——ぶへっ！」

言葉を話している最中に夜空にハエ叩きで顔をひっぱたかれ、女子とは思えない悲鳴（？）をあげる星奈。なぜ客が来たというだけで喧嘩になるのか、疑問に思わないわけでもない。

「あーめんどくさいから俺が出るからな」

「ああ、頼むよ。夜空と星奈が出たら逃げちゃうかもしれないし」
「俺は逃げてくれた方がいいと思うんだけどなあ」

この部活の部員として今の発言はどうかと思うのだが、事実なので訂正しようがない。

コンコンと再びノックの音。っと、あまり待たせると失礼だし、さっさと出るか。

「はいはい、今出ますよ——ってあれ？」

ドアを開けてみるものの、そこには誰もいない。キョロキョロと辺りを見回してみるが、一人する見つからなかった。

「誰もいねえんだけど」

「は？　だつてさっきノックが聞こえてきてから十数秒くらいしかたつてないぞ？」

「いやだつて本当にいねえし」

小鷹が不可思議な顔をするが、事実なのでどうしようもない。実際、ドアの前には誰もいないんだし。

「やはり冬馬が生んだ幻想の産物だったか。何気にするな、人は寂しい時、妄想の中で満足するしかできないのだからな」

「ギャルゲーやってたやつらに言われたくねえんだけど」

あれだつて自分にはないものをゲームという名の妄想で補完するよ
うなもんじゃねえか。

というか、さっきお前もノックの音聞いてたよね？　聞いておきながら今の発言、おかしくね？

「まあいないならいいんだけど」

多少拍子抜けだが、こんな濃い部員に囲まれていたら例の女子も
かわいそうだし、あんなポスターで勧誘されたつてのもおかしな話
だしな。あの暗号擬きを読めたら読めたで厄介ではあるが。

ドア開けっ放しても仕方ないし閉めるか。

そう思いドアを締めようと――

「んあ？」

締めようとしたら視界に妙な物が映った。

——なぜ談話室^{隣人部の部室}4の隣に招き猫が。

しかも招き猫の表情がやけに気に入らない。にやついているだけでなく、握りこぶしを上に向け、中指を立てている。要するに『死ね』とか『地獄に行け』とかのジェスチャーだ。

顔もぶつちやけ福を招いているのではなく、拳を招きそうなム力つく顔。——そして人が丁度一人入りそうなサイズ。

どうしよう。隣人部の誰かが入ってるなら蹴るか消火器で殴るかの二択なのだが……全員が部室の中にいる以上、その可能性はゼロだ。

その場合当然ながら無視するのが普通だが、あの招き猫からとんでもない構ってちょうだいオーラが出る。

……つーが無視したら間違いない俺がKY扱いされるよね。
しゃあねえな……。

「……えっと……招き猫……さん……？」

どうしよう。呼び方に困った結果、置物風情にさん付けしてしまった。
った。

ふふふ……所詮は俺も隣人部^{イタいれんちゅう}の仲間ってことだったんだよ……。あれっ？ おかしいな、悲しいのに笑いが込み上げてくるぜ……。

「あ、あの……大丈夫……？（おずおず）」

いつの間に招き猫の被り物から出てきたのか、土曜に会った女子が遠慮がちに声をかけてきた。

……声をかけてくれるなら、わざわざ被り物なんか用意してくれなくてもよかったんじゃないか……？

天野碧（前書き）

お待たせいたしました。ようやく更新です。オリキャラのプロフィールとかも書いていた方がいいんじゃないかな……

天野碧

さて。少し時間がかかりながらも、何故か招き猫の着ぐるみに入っていた入部希望者と思われる女子を隣人部の部室である談話室4にお招きしたわけだが。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

いづれええ——！　なんだこの空気！？　会話はないし、夜空は無言で星奈の足をぐりぐり踏んでるし、星奈はこめかみをひくつかせながら夜空の脇腹を肘でどすどす突いてるし、小鷹に至っては勿論そんなつもりはないのだろうが、新入部員の女子を威圧しているようにしか思えない。

端から見たら俺らが苛めているように見えてしまっくんじゃないだろうか。新入部員の女子もかわいそうなくらい縮こまってるし。

……いつも思っただが、なんで俺がいつも切り出す羽目になるんだろうか。わかってるよ、適材適所ってヤツですよ！　なんでマトモなヤツがこの部活にはいないんだ！

「えーっと……………いきなりだけど、名前は？」

いきなりの声に驚いたのか、身体をびくつと震わせる女子。

小鷹の視線も相変わらず喧嘩をしている星奈と夜空に移ったので、若干緊張が和らいだみたいだ。まあ、それでもまだびくびくしてるけど。

「……一年生の……天野……碧……です（びくびく）」

あまの……？ あまの……アマノ……ああ、天野って書くのか。声が小さいから、発声がいまいち聞き取りづらい。だがまあ、気弱な子に声をもっとでかくしろとは言いつらいしなあ。仕方ないか。

「おい、お前声が小さい。どこかの残念金髪馬鹿ほどとまでは言わないが、もう少し大きい声で話せ」

「（びくつ）ご、ごめんなさい……」

「お前少し黙ってる陰気サド狐^{キツネ}」

「なんだとこのほうれん草の分際で……！」

夜空^{バカ}の言葉を無視してえーっと……誰だっけ……あ、天野だ。天野に声をかける。

「天野……さんはなんでこんな活動内容のわからないような部活に入ろうと思ったワケ？」

まずはそこからだよな。あんな活動内容がわからん貼り紙で、普通の人間が来るとは思えないし。……さりげに自虐しているような気もするが、気にしないでおこう。

しかし天野の発言はこちらの予想を超えるものだった。

「友達が欲しかったから……」

「……Why？」

いかん。頭が一瞬飛んだ。まさか……あの貼り紙を解読したヤツがもう一人いたのか……！？

「くっ……あんな貼り紙をまじまじと見て更に解読するようなヤツが肉以外にもいたと言うのか……！？この学園には一体いくつの残念がいるのだ……！？」

「ちよつとあんた自分のこと棚に上げんじゃないわよ！大体、あんたが部長なら、あんたは残念の大将じゃ——べふっ！」

三日月夜空の凶器、ハ工叩きが炸裂した。天野は更に怯えた表情になってしまったが、ここは我慢してもらいたい。何故なら、こいつらを止めようとすると俺のストレスが異様に膨れ上がるからだ。

「あーすまないゴミがあつたので潰そうとしたんだが失敗してしまつた。次は仕留める」

「あたしを遠回しにゴミ呼ばわりしやがったわねこのカス狐！ちよやめてそれ殺虫剤でしょ！人に向ける物じゃ——やめろつつてんでしょ！」

ハ工叩きで連発で叩かれながらも、殺虫剤を防ぐとスプレーを取り押さえる星奈。でも殺虫剤だけで手一杯らしく、ハ工叩きによる攻撃は一切防げてない。なんか、かなり不憫に見えてならない。

「で話は戻るけど、キミ、あの友達募集ってヤツ解読したの？」

「友達募集……？」

不思議そうに首を傾げる天野。あれおかしいな。アレを解読したから隣人部^{こじんぶ}に来たんじゃねえの？

「隣人部の部員募集の貼り紙に書いてあつただろ？友達募集って」

「（びくびく）……………」

いかん、小鷹くん申し訳ないが、キミの顔は天野にとってヤンキ
ー以外には見えないようです。

「小鷹、いきなりだけど」

「え、なんだよ」

「帰ってくんない？」

「申し訳なさそうな表情から予想できない台詞が!？」

いやだつてお前顔のこと言うとすぐに傷つくじゃん。だから気を
遣ったんだけど……まあ流石に帰れつてのは酷かったか。自重しよ
う。

と、話が逸れたな。

「もしかしてキミさ、友達募集つてヤツを読んで来たわけじゃねえ
の？」

「???? 貼り紙は見たけど……友達募集つて字は見えてないです…
…多分」

「もしかして今日も入部つてわけじゃなくて？」

「（こく）どんな活動内容なのかなつて思つて……」

あー……なるほど、そういうことか。とんだ勘違いしちまったみ
たいだ。

「ちよつと冬馬どういうことよ」

夜空との喧嘩は飽きたのか、星奈が声をかけてくる。

「つまり天野さんは入部に来たんじゃないくて活動内容を聞きにきた
つて事だよ。あの暗号擬きを読んだワケじゃなくてね」

「だってその子さつき友達が欲しいつて言つてたじゃない」

「友達が欲しいってのは単に天野さんが部活動したい理由だよ。言っちゃ悪いけど、かなり人見知りするみたいだしな、彼女」

というか周りの人間がおかしすぎてわかりづらいけど寧ろ、読めないのが普通ですよ。……つい最近までの非常識が常識になりかけているのが本当にどうしようもない。

「なんだ、つまりアレを解読したわけではないのか。ならば入部の資格はないな」

何故か誇らしげにとんでもなく勝手なことをいつてる夜空^{よぞら}。先生にバレたら明らかに問題視されそうだな、この部活。

「あの……（おずおず）それで活動内容は……？」

「ああ、友達作りだよ」

まあ、実際はゲームとかしたりバカなことやったりしてるだけだが。

「え、友達作り……？」

「って何勝手にばらしてるんだ虫食いほうれん草！」

「言っちゃダメなんて聞いてねえもん。っーか誰が虫食いだつり目コンプレックス！ あ、ごめん謝るからそのGジェット下ろしてくれ」

いくらハエ叩きは防げても、殺虫剤の粉末は避けられない。っーかいつまでもってんだそのスプレー！

「あの……（おずおず）」

天野が申し訳なさそうな顔で会話に入り込んでくる。いや、申し訳ないどころか助かったけど。

「ふん、冬馬の馬鹿がばらしてしまつては仕方ない。聞いた通り、この部の活動内容は友達作りだ」

声高々と宣言する夜空。自分で友達がいないってことをばらして
るようなもんなのに、なんでそこまで胸を張れるんだろうか。いや、
張れるほどないんだけどさ。

「つて無言で八工叩き振り回すんじゃないよ！　うわ馬鹿危ねえつ
ての！」

「黙れ馬鹿。今さっき、貴様から不快な波動を感じたんだ」

いつも通り小鷹の鞆で八工叩きを防ぐ。つーか何波動つて。あんなは
たはテレパシストかなんかですか？

「どうして友達作りなんかを……してるんですか？（おずおず）」

緊張しながら天野が訊ねてくる。え、それを言わないといけ
ないの？

「ふ、そんなのは決まつてるだろう。こいつら全員、友達ができない
力スどもだからだ」

「あんな何自分は関係ないみたいに言つてんのよ！」

「エア友達と話してるやつに言われたくねえ！」

「つーか社会性ゼロのテメエには死んでも言われたくねえよクソ狐
！」

小鷹クン、ところでエア友達つて何？　根掘り葉掘り聞きたいと

ころだが、今は別にいいだろう。

この答えを聞いた天野は、

「友達が……………よかった、私だけじゃ……………」

声こそ所々しか聞こえなかったが、何故か安心したような笑顔を浮かべていた。いや、ぶっちゃけいいもんじゃないよ、この部活。

「ねえ……………」

「あん？」

星奈が声をかけてきた。というか、何故か息が荒いような気がするの。は気のせいなのだろうか。

「ヤバイ、この子メツチャ可愛いんですけど。今の笑顔とか有希子にそっくり」

「は？ 何言ってるんのお前。つーか有希子って誰？」

「ときメモのヒロインよ！ あんたもやったでしょ！？」

「……………あー、あれか」

確かせめめめが最初に攻略しようとしてフラれた眼鏡っ娘だった。け。

つーかあのキャラは眼鏡掛けてたじゃん。その時点で俺にとって似てないと思うんだけど。

「ハアハア……………ちょマジ有希子に見えてきた。あの気弱そうなところとかマジ天使！ なめまわしちやいたいくらい可愛い……………！」

「ぐえへへ……………」と、形容し難い笑顔……………とは思えない表情を浮かべる星奈。

ヤバイ。なんか前のゲームで妙な扉を開いてしまったのか、今の

星奈は俺が引くほど気持ち悪い。

ギャルゲーマーってのは全員こんな感じなのか？ だったら確かに引かれる理由もわかる。

「あの……（おずおず）」

星奈の視線には気づかないのか、天野は今まで通りの若干怯えたような感じで話しかけてきた。……気づかないのは運がいいのか悪いのか……微妙なところだ。

「入部したい………んですけど（びくびく）」

「え？」

入部希望だというのに、微妙な声を上げてしまった。

「ふん、友達がいるようなリア充はごめんだ」

「……私、友達いない（しゅん）」

夜空の発言は地雷どころか原爆投下だったようだ。自虐的な表情の天野に多少なりとも申し訳ない気持ちがあったのか、夜空は少し言い淀んだ。

「う……し、しかしあの貼り紙を読めないのでは……」

だから読めるようなヤツなんてほとんどいねえっての。そして今の落ち込んだ表情の天野も琴線に触れたらしく、星奈は涎を垂らしそうな、夜に見かけたら通報しそうな程に危険な表情になっている。……マジで危ないかもしれん。

つか俺も天野みたいな人種はこの部活はやめた方がいいと思うんだよね。部員がアレだし……うん？

「コレ、もしかしてポチモン？」

思わず天野の鞆についてるキーホルダーを指差す。

ポチモンってのはポチットモンスターってゲームの略で、一万五千百匹のモンスターを集めるゲームだ。

子供に人気のゲームだが、やり込み要素が多い上に、インターネット環境が揃っていれば全国のプレイヤーと対戦できる。俺も持ってるんだけど、なかなか対戦では勝てないんだよね。

「あ、うん……私、ゲーム好きだから……」

タメ語になっているが、元から俺は言葉使いには対して気にしないので話を続ける。

「え、マジで？　じゃあモタメンの6V持ってる？　いくらやってもゲットできねえんだけど」

「（こくり）……二匹持つてる……性格は両方わんぱくだから、一匹あげる……？」

「よし、入部を許可しよう」

部長だかなんだか知らんがどうでもいい。こんな間近にゲーム好きがいたとは！　この部活でも役に立つ時があるじゃないか。

「勝手に許可するなほうれん草！　部長は私だぞ！」

「いや、別にいいじゃん。6Vモタメン貰えるんだから」

「それは貴様の都合だろう！」

「というか冬馬、モタメンってなんだ？　ポチモンは少しわかるけど……」

「そんなことはどうでもいい！　くっ……何故こんなことに……！」

悔しげに視線を落とす夜空。つーかなんでそんな部員増やしたくないんだよ。意味がわからん。

「よろしくね碧ちゃん……！ 碧ちゃん……ハアハア……！」

「よ、よろしく……お願い……します……（びくびく）」

こんな感じで部員が一人増えました。

つーか星奈のヤツ、マジヤバい。妙な趣味に目覚めてしまったんだろうか。その責任の一端が俺にあると思うと、なんかやるせない。

……あ、そういえば入部の理由みたいなのを聞いたくの忘れたな。友達ができねえのは人見知りのせいだと思っただけど、もしかしたら理由があんのかもしれねえし……明日辺りに聞いてみるか。

天野碧（後書き）

多分、あと一人くらいオリキャラ出すと思います。あくまで多分ですが……

朝の部活動 1 (前書き)

今回でオリキャラの『残念』な部分が垣間見れます。

朝の部活動 1

天野が入部した次の日の朝。普段なら今頃はベッドの中でぐくぬくしながらゲームをやっている時間帯なのだが、珍しく今日は隣人部の活動があるため、ゲームを我慢して登校している。

……律儀に行くあたり、俺って結構従順な性格なのかもしれない。以前も何だかんだいいながら、星奈のスボバ持ってやつたりもしたし。

どうでもいいことを考えていると、いつの間にか下駄箱の前に到着していた。

上履きをポイと放り出し、靴を下駄箱にしまう。ぐにっかかとと踵の部分を潰して上履きに履き替える。

この学校の生徒ってほとんど踵のとこ潰してるヤツいないんだよね。確かに俺が不真面目ってのは認めるが、そこまで真面目になられるとますます俺の居場所がなくなるんだけどなあ。

「はあ……入る学校、間違えたんだろうなあ……」

ぶつちやけ、俺がこの学校に入った理由って家から一番近いからだし。まあ、今さらどうこう言っても変わるわけじゃないんだけどさ。

「あ、あの……（おずおず）」
「んあ？」

横から声をかけられた。

振り向いてみると、肩に掛かるくらいの茶色い髪をした女子がいた。……って天野じゃねえか。

「ああおはよーさん、天野……じゃなくて……み、碧……だっけ？」

「（こくこく）……おはよう……冬馬……さん」

天野……じゃなくて碧ときこちない挨拶を交わす。いや、ぎこちなかったのは俺だけで向こうはあまり意識してないみたいだけど。

昨日と三人称が違うのは……大体理解できると思うが、隣人部の意味がわからん決まりのせいで天野のことも名前で呼ぶことになったからだ。

友達を名前で呼ぶヤツもいるには違いはないけど、苗字で呼ぶヤツもいるだろうに。こんな決まり、あんまり意味ねえと思うんだけど。まあ、後々うるさくなるから文句は言わないでおくが。

でもなあ……。

「……………？　どうしたの……………？」

「いや、なんでもねえんだけどさ」

正直な話、名前で呼ぶのにかなり抵抗があんだよね、この子。

星奈とか夜空はキャラが濃すぎるせいかな、比較的意識しなかったんだけど、この子はかなり気恥ずかしさが先立ってしまう。イメージ的にも、お前とか言いづらいし。

あともうひとつ気になることがあるんだが。

「あのさ、なんで俺だけ『さん』なの？　小鷹とかは『先輩』って呼んでたじゃん」

俺も先輩とか結構言われてみたいんだけど。だって中等部から部活とかやってなかったから、先輩なんて言われたことほとんどねえんだもん。……ごめんね小さい望みで！

「友達ができた時のための練習……しようと思って……」

「ああ、なるほどね」

結構考えてるんだなあ。

「でもさ、だったら他の連中もさん付けで呼んだ方がいいんじゃないの？ 星奈あたり天井ぶち抜くくらい喜ぶと思うけど」

「（ふるふる）……………他の人たちは……………怖い……………」
「確かに否定はできねえな」

他の連中は確かに色んな意味で怖い部分がたくさんある。本人たちのために何かは言わないでおくが。……………俺が童顔だから取つつき安いつてのはあまり気にしないでおう。

「まあ、話し込んでても仕方ねえし、部活行くか？」
「（こくり）」

小さく頷く碧。うーん……………なんかこっちは取つつきづらいなあ。

「……………」
「……………」

ぐおおお——！

案の定気まずい。

一緒に歩き始めて三十秒足らずでギブアップです。
元々言葉数が少ないヤツだし、しょうがないっちゃしょうがないんだが、それにしたってこの空気は苦しい。

この空気を払拭するには何かしら会話をしなきゃならねえんだが……………やっぱり俺が振らなきゃダメですね。なんか、俺って隣人部の中で最も面倒な位置にいるような気がする。

「あー……そういえば昨日、モタメンありがとな」

昨日、碧が入部届けを出した後も多少活動——なんて大層なもんじゃねえけど——したため、その時に約束した6Vモタメンをもらったのだ。ぶっちゃけ会話がこれくらいしかなかったんだが――

「うん……どういたしまして」

「ああ……」

「……」

「……」

一言の下、バツサリと両断された。もうやめて！ 俺のライフポイントとはゼロよ！

もう少しで部室に着くんだが、んー……なんか忘れてるような……あ、そうだ。聞こうと思ってたことがあったっけ。

「そういえばさ、キミ、なんであんな部活に入ったの？」

部員としてその発言はどうなのかとも思ったが、切り出し方が思いつかなかったたので仕方がない。

「え……？ それは……」

「いや、友達が欲しいってのは聞いたからわかってんだけどさ。なんでそんなに人見知りすんのかなって思っただけ。元からとか別に言いたくねえなら構いやしねえけど」

碧は少し困ったように眉間に皺しわを寄せた。案の定、何かしらの理由があるみたいだ。

まあ、さっき言った通り、言いたくないなら無理に聞き出すつもりはないが。

「……………私、お姉ちゃんがいるの」

「へえ……………」

言おうと決めたらしく、口を紡いでいく。

「私、いつもお姉ちゃんの後ろにくっ付いてたから……………」

「ああ、典型的な依存か」

「（こくり）」

俺の発言に少し痛いところを突かれたのか、多少落ち込んでしまった。うーん……………でも俺、内側に溜めるの苦手だからなあ。大目に見てもらう他ないだろう。

「でも人見知りが友達できないって理由なら、他の連中より望みあるな」

「……………そう……………なの？」

「ああ、少なくとも星奈と夜空よりは断然望みがあると思うけど」
「バカとアホって誰……………」

あいつらは友達云々の前に常識が欠落しているため、人間関係自体が上手くいかないだろう。それを直そうとしないあたり、色々と面倒くさすぎる。

人見知りは人と話してるだけで解決してくから、大分ましだろう。しかも隣人部には貴重な普通の人材だ。……………普通の人間が恋しくなってるあたり、俺も毒され始めたみたいだ。

「……………あと、趣味をどうにかしたいの」

「え、趣味？」

ぼろつと言葉を溢す碧。趣味ってどうにかするもんなのか？ 少なくとも俺はどうにかしたいとは思ってないが……。

「……男の子同士とか女の子同士の会話を見ると変な想像をしちゃうの」

「それって同性同士ってことか？」

「（こくり）」

なんか、凄く嫌な予感がする。人見知り以外は普通の子供と思っ
てたいたが、何か亀裂が入ったような……。

「……女の子同士が絡み合って互いが互いを求めるシチュエーションを一度でいいから見てみたい。あわよくば放課後の教室でブラザーを脱いで胸元をだけさせて互いの胸を——」

「ストップ！ フリーズ！ ちょっと落ち着けそれ以上はこの世界の規律に反する！ それに俺は女子じゃないし俺に迫ってもその欲望は叶わねえぞ！」

何故か壁に追い詰められた俺はかつてないほどの危機を感じたので、碧を首がもぎれるのではないかと勢いで揺すった。

この世界は全年齢対象なのでそれ以上はまずい。いや、それよりもヤバイ。コイツのことを第一印象だけで結論づけていたが、今隠れた印象を見つけてしまった。

「……あ」

まるで今気がついたというような声を洩らす碧。

「（しゅん）……ごめんなさい……またやっちゃった……」
「い、いや別に……よくはねえけど……」

もうフォローのしようがない。コイツ、同性愛の肯定者……というか溺愛者か……。ヤバい。クセのある隣人部の中でも見たことない人種だ。

昨日の星奈が比較的近いかもしれないが、それでも俺にとって未知の人種には違いない。

おい、まさか……

「もしかして直したい趣味ってのはその性格じゃなくて……」

「（こくこく）人前で妄想する癖を直したい……」

なるほど……キミの趣味の一端を治したいのであって、根本を治すつもりはないと。

……これからコイツに対する認識を改めなければならないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2156p/>

僕は友達が少ないEX

2011年10月26日14時10分発行